

## 小山田与清「作歌故実」二種（一）

山松<sup>\*2</sup>今<sup>\*1</sup>  
田本井  
洋智  
嗣子明

「作歌故実」は小山田与清が残した歌学書である。与清は江戸後期、江戸の人。万巻の書をその書倉に擁して読み続けた人である。読書にあたって万巻の索引を作成することを志し、また興味に従って抜書して、後にこれらによって著作をなした。「作歌故実」はそうした中で得た知識のうち和歌の故実と考えるものをまとめていったもので、知識の集成や整理や引き出し方、そのまとめ方などが営みとして現れており、その様相は興味をひく。また、これが書写されて周囲の人びとの所持するものになったことは、彼らの「故実」の共有の枠がいかなうものであったかという点でも重要であろう。ここに紹介する理由である。

筆者のうち、松本は「扶桑拾葉集」研究から水戸藩の彰考館と徳川斉昭の蔵書の研究へ進み、「扶桑拾葉集」の注釈や「八洲文藻」の編纂に関わり、晩年にその生涯の蔵書を水戸に寄贈した小山田与清その人と蔵書、また著作へと対象を広げた<sup>(注1)</sup>。山田は南部家旧蔵の「散木奇歌集」二点が小山田与清の書入本を再現した伝本かとの推測から南部家旧蔵書とその調査を行い、与清の蔵書と購書、読書、索引や抜書、著作などの文芸活動のありさまと、与清と南部家の周囲にあった人々について考察した<sup>(注2)</sup>。このようにして共通の対象となったのが「作歌故実」である。その後、本総合科学研究によって、中世の歌論、歌学を研究分野とする今井が参

加することになり、松本も同行して共同で盛岡市中央公民館と後にそこから移管されたもりおか歴史文化館の南部家旧蔵書の調査を行った<sup>(注3)</sup>。このような次第で小山田与清の「作歌故実」のうち、後に述べるけれども完成したかどうかは分からぬながら成書の形態を持つ「作歌故実」と、これと同書ではないが、「松門倭歌談<sup>「作歌故実」</sup>」と同じ書名があり、進めていけば同様の内容の書になったかと思われる著作の生成過程の初期の姿を見せるもう一本の二書を翻印して紹介することにしたのである。なおこの二書は別書だが、右のように「作歌故実」の名称が共通し、さらに外題を「作歌故実」とする前者には彰考館本やもりおか歴史文化館本のよ

うに端作に「松門和歌談」とするものもあって安定しないが、今はその内容を示す「作歌故実」を両者を合せた呼称として標題とし、それぞれを別々に対象とする記述には右の各書の標題を用いることにした。

今回紹介するのはこのうちの「作歌故実」の村田たせ子写本である。「作歌故実」の伝本は多くなく、もりおか歴史文化館（南部家旧蔵本二本）、彰考館徳川博物館、国会図書館、宮内庁書陵部蓬左文庫、京都大学文学研究科図書館、天理図書館（竹柏園本）、広島大学福井文庫、早稲田大学図書館（二本）等に所蔵され、いずれも写本である。このうち彰考館本は「潜龍閣蔵書記」の印記があるいわゆる小山

\*1 福岡女子大学文学部教授

\*2 早稲田大学図書館特別資料室

田本で、与清の手元の本であったことは間違いない。同伝本は「原本の一つ」ともいべきもので、第一巻と第二巻とが別筆で二筆によって書かれているが、与清筆とは認められない。また本文上部にある書人も本文と同筆で与清自筆ではない。おそらく与清が草稿を一旦何人かに整理させたもので、書写者が書写後に一見してさらに書き落としの修正など本文欄外に書き込んだものと思われる本であるが、別に与清の指示かと思われる指示もある。すなわち、上巻十五項目の次に下巻の三項目の「晴の時」と四項目の「白紙を置」をここに移すようにとの指示だが、伝本はこの通りに項目を移動した形の書陵部本、南部家旧蔵本などと、元のままに書写された早稲田大学図書館の村田たせ子写本や蓬左文庫本などの二種がある。項目が移動されておらずこの指示自体も書写していない後者が与清の初期の草稿に近いと思われる、また村田たせ子本には先の修正がほぼ本文にあるところから、あるいはこの彰考館蔵小山田本の前段階の与清草稿を写したものであるいかとの推測が一応は可能である。小山田本との関係はさらに考えるべき点多いが、これまでの経緯から与清と与清周辺の人々の関わりを表わすものとして筆者らが研究対象として取り上げていたので、右の村田たせ子写の一本を翻印することにしたのである。なお、後記奥書の書写者「たせ」はその筆跡や京都大学本の奥書<sup>(注4)</sup>などから村田たせ子と考えられる。たせ子は周知のように村田春海の養女で、春海の弟子であった与清と関わりが深く、書物の貸借、互いの歌会への参加など、また与清と出版上の関わりもあり、与清著の序を書くなど、「擁書樓日記」に濃やかな交流が見える人であり、こうして写されたのがこの伝本である<sup>(注5)</sup>。

書誌的な概略は次の通りである。

早稲田大学図書館蔵(函架番号へ4-470)。楮紙袋綴二冊。文政八年、村田たせ子写。寸法縦二三・八、横一六・三糎。第一冊薄橙、第二冊縹色のともに無地紙表紙。ただしこれは近代になって付された保護表紙で、今扉の体になっているものが本文共紙の本表紙である。墨付は一冊目七二丁、二冊目五三丁、遊紙はない。外題は現在の表紙の左上の題簽にそれぞれ「作歌故実 一」、「作歌故実 二」<sup>(注6)</sup>、内題(本表紙外題)は打ち付け書きで左上に「作歌故実」、「作歌故実 二

巻之内」<sup>(注7)</sup>、目録に一冊目「作歌故実」、二冊目「作歌故実卷之二」とあり、本文端作は二冊とも「作歌故実」。半丁を八行に書写。朱、墨の書入がある。また章段の通し番号第一冊は朱、第二冊は墨の丸入り数字で示している。第一冊最終丁裏に「松屋のあるしよりこひえて／文政八酉年む月うつす たせ」の書写奥書。旧蔵者の印記はないが、現蔵者を表す「東京専門／学校図書」の大型の単郭朱陽印があり、第一冊には他に「明治三十一年八月十八日ダイゴ氏寄贈」の朱印に墨で書き入れた受入記録がある。本文は前述の如く彰考館蔵小山田本と小異があるが、漢字仮名の別などはほぼ同様である。なお、本伝本に時折見られる細字の書入は原本の本文を書き落としたものを補ったものと若干のたせ子による追記である。

ところで、現在の表紙に「二」<sup>(注8)</sup>とあるのはいうまでもなく二冊本であることを示す。彰考館本も同様であり、この巻次の表示はもとの本の表示に従っているであろう。伝本によっては外題を上下とするものもあるが、これは現存の実態を示しているのであって、「作歌故実」としては巻一、巻二の表示がなされ、現状が両巻が残っている状態である。しかし二冊を超える伝本は存在しないので、すなわち作品としてはこの後も続巻を予定していたが中絶した状態であり、その段階のままある程度流布したと見られる<sup>(注9)</sup>。

計画が壮大なあまりに中絶した与清の著作に「歌学大成」全五十巻があるが、本書も同様であろうか。「歌学大成」は文政三年二月に近刻の予告がなされ、「哥よみ文かくへき故事又はおもしろき詞ともをあつめ証歌をあけて詩学大成円機活法などの体に考証正しくものせられたる書也歌学者流此書を懐中秘とせは万巻の書をみしにおなしかるへき大有益の書なり」<sup>(注10)</sup>と記されていたが、文政十年以前に刊行を見ず放棄された。与清は長年蓄積した「万巻の書」の抜書をもとにこれを作るつもりであったらしいが、同様にして成ったと思われる文政八年に写された本書が「歌学大成」と関係があるのかないのか、あるいは本書が「歌学大成」の一部だったのかそうでないのかなど様々な想像を誘うけれども、みな想像の域を出ない。(以下続稿)

注

- (1) 「献上本『扶桑拾葉集』の形態」(国文学研究資料館紀要30 二〇〇四・二)、「途絶した『歌学大成』」(早稲田大学図書館報 ふみくら77 二〇〇八・一二)、「早稲田大学図書館蔵『松屋蔵書目録』翻刻」(早稲田大学図書館紀要57 二〇一〇・三)
- (2) 「南部家旧蔵群書類従本『散木奇歌集』の輪郭」(福岡大学研究部論集A 人文科学編九―一 二〇〇九・五)、「問宮永好、八十子と南部利剛、明子と―挿話として―」(福岡大学人文論叢四―一二 二〇〇九・九)、「散木奇歌集『南部家旧蔵本』の背景―伝本の位置を測るために―」(福岡大学研究部論集A 人文科学編一〇―七 二〇一〇・七)
- (3) 調査にあたって研究協力者の鯉坂聡子の助力を得た。
- (4) 同本は京都大学文学研究科図書館蔵(函架番号 国文学/Fo/6)、巻首に「下毛野/古家館/図書印」の蔵書印がある明治二年写本。奥書は「松屋のあるしよりこひえ給ひて文政八の年む月/たせ子のうつし給へるを/明治ふたつといふ年の葉月またうつす/春子」。
- (5) 早稲田大学図書館蔵のもう一本(へ4―8166)は新たに購入された井上宗雄旧蔵本(巻一・巻二、二冊)である。これは岸本由豆流旧蔵本で、本文にやはり小異が見られる。村田たせ子同様小山田与清の周囲の人物の旧蔵として注意される伝本である。また、前注の京都大学本はたせ子本の転写本である。なお、早稲田大学図書館にはさらに前述の別本の「松門倭歌談<sup>〔一名作歌故〕</sup>」があり、これは小山田与清自筆稿本である。この本については次稿(二)で述べる予定である。
- (6) 一冊目の下部にも「一」などとあったかもしれないが、汚損で判断できない。「二巻之内」はラベルの下にあり「二」のみが見える状態である。
- (7) かつて松本が紹介した「松屋蔵書目録」(早稲田大学図書館蔵 イ二―二三〇九)にも「作歌故実 二」とある。注1参照。

- (8) 『草縁集』の文生堂・耕文堂「蔵板目録」
- (9) 松本「途絶した『歌学大成』」(早稲田大学図書館報 ふみくら77 二〇〇八・一二)

- (10) 無窮会図書館神習文庫蔵「歌学大成」(小山田文庫の印がある井上頼圀旧蔵本)(請求番号一〇六九七)。注9参照。

なお、翻印にあたっては早稲田大学図書館の許可を得た(許可24―188号)。本書の閲覧と翻印を許された早稲田大学図書館、閲覧時にご助言をいただいた故井上宗雄、宗像和重両氏、また京都大学本についてご高配をいただいた佐野宏、金光桂子両氏に謝意を表する。

《翻印》

翻字は概ね次のように行った。

- 1、漢字仮名の別、平仮名片仮名の別、踊字、仮名遣い等は原本のままとした。合字は単独の字に戻した。一部有意のものを除いて、漢字は通行の新字体を用い、異体字を現在通行の字体に改め、別体はそのまま残した。踊字はなるべく原態に近いものとした。ミセケチ、摺り消し、重ね書きなどによる本文の訂正は訂正結果をとり、補入はその存する位置に(へ)を付して記した。なお、一部繁雑になる図をそのままにしたところがある。
- 2、字の大きさ、改行、字高、二行書きの部分などは極力原態のままとした。振り仮名、濁点、句読点の類を新たに付すことはしない。すなわちこれらはもとのものである。振り仮名や傍記などは、その位置も含めもとのままとした。朱書きの部分は(朱)と記した。なお、章段を示す丸入り数字は一冊目はすべて朱だが、二冊目は墨書である。
- 3、虫損、汚損などの翻字不能の部分は推定できる字数分の□を宛て、その右傍に(虫損)のように記した。明らかに本文を推定できる場合は(○○カ)のように傍記した。本文に明らかな誤りがある場合は、その右傍に(ママ)と記したが、本文を推定できる

場合は(ママ、「○○」カ)のように傍記した場合もある。その他の私注もすべて括弧に入れて記した。

4、丁の変わり目には最終行の下に」を付け括弧の中に丁数と表裏を算用数字とオ・ウの記号とで示した。

作歌故実 一 (外題)」

作歌故実 (扉)」

作歌故実

目録

①<sup>宋</sup>作歌詠歌

②<sup>宋</sup>歌をつくる

③<sup>宋</sup>くちつ歌

④<sup>宋</sup>詞人歌人歌読

⑤<sup>宋</sup>歌枕

⑥<sup>宋</sup>本居氏の評」(1オ)

⑦<sup>宋</sup>万葉家

⑧<sup>宋</sup>歌名をもてあらはる

⑨<sup>宋</sup>草子物語外題

⑩<sup>宋</sup>雑題に季をよみいる、

⑪<sup>宋</sup>近世の人の歌をとる

⑫<sup>宋</sup>仮名づかひ

⑬<sup>宋</sup>定家卿の仮名づかひ

⑭<sup>宋</sup>古学通統」(1ウ)

⑮<sup>宋</sup>和歌披講

⑯<sup>宋</sup>百首歌

⑰<sup>宋</sup>懷紙の始

たとうかみ ふところ紙

①<sup>宋</sup>懷紙歌書様

②<sup>宋</sup>真名の懷紙

③<sup>宋</sup>一首懷紙

書切らぬ字 日月君の字」(2オ)

賀懷紙の字 沓冠

墨続 奥の明間

歌の闕字

④<sup>宋</sup>二首懷帛

⑤<sup>宋</sup>三首懷紙

⑥<sup>宋</sup>五首懷紙

⑦<sup>宋</sup>七首懷紙

⑧<sup>宋</sup>十首懷紙」(2ウ)

⑨<sup>宋</sup>十三首 十五首 廿首 三十首 五十首

百首 千首等の懷紙

⑩<sup>宋</sup>懷紙の料紙

⑪<sup>宋</sup>懷紙の端作

春日 同詠 題ノ割書

法楽 割位署

同姓の亭主には姓を書す

凡人懷紙 姓の細書と太書」(3オ)

僧の懷紙 児懷紙

致仕の人の懷紙

遊覧の懷紙 一首懷紙

二首以上の懷紙 季同

季書 端作書初

端作文字

倭和歌哥調等の字



端作闕字 未公文勘公文 「(3ウ)

二字題三字題 名乗

経文端作 もと草

(六行分空白) 「(4オ)

(半葉空白) 「(4ウ)

作歌故実

①(巻) 作歌詠歌

うたよむことを日本紀万葉などに作歌と書

たりまた万葉に詠<sup>ヨメル</sup>天<sup>ナ</sup>詠<sup>ヨメル</sup>月<sup>ツキ</sup>などあれば

中昔の書に詠歌と書るもひがことにはあら

す京極黄門ハ書ノ名に詠歌大概とも名

づけられき崇神記には詠の字をウタフ

ともよめりうたよむといふは宇多は発声の 「(5オ)

名よむは引声の名也神武紀<sup>年</sup>戊午の条に誦此<sup>ヲ</sup>云<sup>ハ</sup>二字

多預<sup>タヨメト</sup>雄略記<sup>四年</sup>の条に歌賦ウタヨミ枕草

子<sup>春曙抄</sup>むとくなるもの、段にうたよみして

おこせたまへる云々など見えその外日本紀の中に

歌の字誦の字をウタヨミと訓たるは挙るに

違<sup>イヘ</sup>なし宇多ハ声ヲ発すにいふ古事記<sup>の條</sup>に

に其猪怒而宇多岐依来故天皇畏<sup>ニ</sup>其宇

多岐<sup>タギ</sup>登<sup>ノ</sup>坐<sup>マ</sup>榛<sup>ハ</sup>上<sup>ヘ</sup>とあるも猪の声を揚て依<sup>ヨ</sup> 「(5ウ)

来<sup>ク</sup>さまにて宇多岐ハ声揚の略也俗言にウナ

ルといふも声揚<sup>コエアゲ</sup>の略なるべし多と奈は音

かよへり本居氏<sup>兵衛</sup>は宇多岐を日本紀に宇

陀<sup>タ</sup>根<sup>キ</sup>と書たれば陀を濁り岐を清べしいひ

たれど日本紀の仮名は清濁混用て証にしがたし

すべて発声引声ともにアイウエオの語が中

国の自然にてこれを母音とす預<sup>ヨメ</sup>牟<sup>ム</sup>は呼也牟

と夫の濁音は通<sup>ツ</sup>例也声を引をいふ古事記<sup>ノ</sup>卷上 「(6オ)

稲羽<sup>イナバ</sup>の菟<sup>ウ</sup>が鰐<sup>ワニ</sup>を欺<sup>アサムケ</sup>る条に走<sup>ハシリツ</sup>乍<sup>ミ</sup>読<sup>ミ</sup>度<sup>ミ</sup>また

読<sup>ミ</sup>度<sup>ミ</sup>来<sup>キ</sup>などあるも物を数<sup>カフ</sup>るにひとつふたつなど

声<sup>コエ</sup>立てよぶゆゑ也書籍<sup>ヲ</sup>を讀<sup>ヨム</sup>もまた呼<sup>ヨ</sup>の

通音にておなじ

②(巻) 歌をつくる

うたをよむといふはろんなし万葉の作歌の

字を賀茂翁<sup>訓</sup>の万葉考にはヨメルウタと訓<sup>ヨマ</sup>

れたれど夫木<sup>渡部</sup>二詞書に引たるにはつくるうた 「(6ウ)

とよめり顯宗紀<sup>前</sup>に詞人ウタツクルヒト云々繼<sup>ニ</sup>牀

二条大皇太后宮ノ大式が集に哥めせど心だくみのはかなさは斧のおとしてえ

こそつくらね此哥にも工の木をつくるによせてよめり

紀<sup>七年</sup>に斐然之藻ウタツクルミヤビ云々など見

えこの外紀中に作歌の字をウタヲツクルよめる

所おほかり空穂ノ藤原の君にうたつくりあそび

もしければ云々同吹あげの上に歌つくりなどし

つゝよみあげてきんにあはせてもるごゑにずん

じたまふ云々枕草子<sup>春曙抄</sup>鳥はといへる段に

哥にもふみにもつくるなるは云々などもあり古 「(7オ)

事記にも作<sup>ニ</sup>御歌と書たるを本居氏の伝に

はミウタヨミシタマフとよめり

③(巻) くちつ歌

くちつうたは口ずさみなどいふにおなじ後に

ずんじなどいふたぐひにや雄略紀<sup>四年</sup>の条に口号

クチツウタ云々などあり口号の義ハ嚴滄浪詩

話に見え口唱の字ハ洛陽伽藍記に出て共に

西蕃<sup>カラクニ</sup>の語をかりて書れし也後の合戦の書」(7ウ)  
に京童<sup>クチウタ</sup>の口歌といへるは今はやはり<sup>ウタ</sup>謡ハナ<sup>ウタ</sup>謡な  
どの類にておなじからず

④<sup>(本)</sup>詞人歌人歌詠

顯宗記<sup>前記</sup>に詞人ウタツクルヒトとあり詞人の字は  
旧唐書ノ張九齡が伝に見ゆまた空穂藏びら

きの中に此は、みこはむかし名高かりけるひめ  
手かき歌よみなり<sup>云々</sup>源氏ノ玉かづらにこたび

の歌よみ<sup>云々</sup>又わざとある哥よみの中にては<sup>云々</sup>」(8オ)

枕草子<sup>春曙抄</sup>七の巻抄むくつけなるもの、段に女すこし

我はとおもひたるは哥よみがましくぞある<sup>云々</sup>大和

物語<sup>上の巻約殿</sup>にあなおもしろの玉のうたよみや<sup>云々</sup>

栄花物語初花に歌よみの家々の集ども<sup>云々</sup>

元真集<sup>(一文字空白)</sup>につくしにて歌よみあまた<sup>(二文字空白)</sup>

俊忠集に哥よみの名ある女房<sup>云々</sup>林葉集

<sup>卷上</sup>に哥よみをえらびて<sup>云々</sup>安法々師集に哥

よみにくばりて<sup>云々</sup>などおほく物に見えたるは」(8ウ)

〈宝物集<sup>巻の</sup>に当世ノ歌詠ドモ<sup>云々</sup>また万葉集ヨリ以来ノ集ニ入ル歌詠ドモ其数ヲ

シラス<sup>云々</sup>〉

拳<sup>アゲツツ</sup>尽すべからず黒谷和語灯録<sup>巻五の</sup>に歌詠ハ罪ニテ候歟

答フアナガチニ得候ハジ但シ罪モ得功德ニモナルトモ

アリ旧本今昔物語明月記その外の記録

に歌人とも歌詠とも書たり

⑤<sup>(本)</sup>歌枕

源氏玉かづらによるづのさうし哥まくらよくあな  
いしり見つくして其うちのことばをとり出るによ  
みつぎたるすぢこそつようはかはらざるべけれ<sup>云々</sup>」(9オ)

花鳥余情に哥枕とは名所の歌をあつめたるを  
いへり能因法師が五代集の哥枕のごとしと注  
して細流抄一葉抄岷江入楚などみな同説  
なりまた業平実方などの陸奥下りの事を

しるせる書どもに哥枕を見るといふことあり

歌の名所を見ることも又興義抄ノ上ノ秀歌体の

条にふるき人おほく哥枕をおきてすゑに思ふ

こゝろをあらはすとあるは序哥の縁語枕詞など」(9ウ)

のこと、きこゆ門人篠原資重が説に歌枕と云は名

所の事しるせる書にかぎらすすべて歌詞の注釈

書の名なるへしそは今伝はれる能因歌枕といふ

ものも詞の注にて名所の事もしるしたれどこれ

は真偽さだかならずとていひもけつべし公任卿の

歌枕能因の歌枕とて古書に引たるに名所の

事にかきらぬをもてしるへし源氏の注釈どもの

説はうけがたし歌枕は歌詞のこと、心得たるかよし」(10オ)

といへるは実にいはれたる説とすべし能因が諸国

哥枕三卷あり坤元儀と号すと顯昭が拾遺抄

注にいへり

⑥<sup>(本)</sup>本居氏の評

本居氏<sup>長官</sup>は歌口にあらずとてそしりいふこと近

来の歌先生の口くせなりされど円珠庵ノ阿闍梨

神製<sup>調良</sup>本居氏などは千巻万巻<sup>チマキヨロツマキ</sup>の書

よみあきらめて古今<sup>イニヘイマ</sup>に冠絶<sup>ヒイデ</sup>たる大家なるを」(10ウ)

おふけなくろうしいはんはかしこしともかしこきわざ

なりそはもとねたましき心よりこれをだにと

いひたつるなめれどおよびがたきわざなるをや鈴

屋家集に古跡近跡をわけてよめるも学者

のしわざなり花三百首もなべての人よくしてん

やかのとへ上手の莊周に本居氏と近來の

歌先生とを評せさせたらんにはいかなるわざ

ことをかいひ出べき 「(11オ)

⑦(本) 万葉集

世に万葉家の先生と自称人おほかりその先生

万葉を講ぜず校合だにせぬはさら也一わたりもよ

みとほらず本をしもたらでしたりがほな

るはいかなるゆゑにかあらん 諺に論語よみろん

ごしらずとかいふこととおもひあはされひとりゑ

まれひとりはらきらるゝはや

⑧(本) 歌名をもてあらはる 「(11ウ)

儒者は諸名をもて世にあらはれんことをはづ倭

学者も歌学者うたよみなどいはれてやまは

くちをしかるへし詩は別才とかいふめるごとく歌は

学のらうによらぬことなれば白髪(シラカ)の老翁(ヨデ)も若

女房によみへさるゝためしおほかりされどもの

まなぶ力なき人は歌をだによみえて世に

もしられずてはいかゞはせん学者の歌は韓退士

柳子厚が詩の類(タタヒ)にて別に味(アデハヒ)あり 「(12オ)

⑨(本) 草子物語外題

東野州聞書に常光院來臨あり申されしは

哥双紙(ゲダイ)をば外題(ゲタイ)をはしに例式のやうに押也

物語(オス)は中に押よし申されし可(シ)知(ル)之(ヲ)云(ク) 塩囊

抄(五)に双紙ノ銘ヲ中ニ書アリ端ニ書如何

勅撰等ノ歌草子ハ皆端ニ書大和物語伊勢

物語等惣テ物語ト云クハ必ズ中ニ書ク也ト是冷

泉家ノ之記也其外ハ無キ沙汰一歟又於テハ聖教二天 「(12ウ)

台宗山門ハ多分中ニ書キ寺門ハ必緒二書クト云々

按に管見野水抄(二)萩原随筆(一)安斉随筆

火打(一)などにも此事をいへりさて外題はうはがきとも

うはぶみともいふべし伊勢物語(段十三)にうはがきに

むさしあぶみとかきておこせて云々新古今(別離)に

紫式部北へゆく鷹のつばさにことづてよ雲の

うはがきかきたえずして夫木抄(藤部三)に為家

かけてとふたが玉章としらすらんかりのつば 「(13オ)

さの雲のうはがき同(雅十四)雅有このたびは見てかへし

けり手なれつゝひく墨たがふふみのうはがき続

世継(草の雲(ママ)一巻五) に行尊僧正のもとにやりたまへり

けるふみのうはがきには云々宇治拾遺(九段)の巻に

大和より瓜を人のもとへやりける文のうはがきに

云々孝徳紀(二年)に題ウハブミ云々蜻蛉日記(中)に

うはぶみに西山よりとかいたるを云々など見

えてこれらは消息文のうはがきの事なれど 「(13ウ)

通はして書籍の外題の名にもいふべきなり

⑩(本) 雑題に季をよみいるゝ

徹書記物語に雑の題にてはまづ季をよまじ

とするありおのづから季のよまれん事をば

とゝむべからずとあり按に季は当季のこと也

⑪(本) 近世の人の歌をとる

近き世人の歌集をもてはやしその心をも

その詞をもわがもの顔にとりなせるはいとゝ

〈遠嶋御抄に当世の上手などおもしろく詠じたるをみてはやがて其やうに珍らしき

ことをとりてよむとまだしき哥人のさだまれることも用意あるへし」(14オ)

くちをし古き歌は本歌にもとり詞をもまね

ぶこと常なれど近き世の歌をかくしとるはぬす

人のしわざ也徹書記物語にきぬをぬすみて

小袖にして着たるやうとも百余年の人の哥をば

とりてよまぬこと也ともいへるをおもふべしいかに名高

き人の歌集にもあれ二百年の此方なるは見ぬが

よきも見れば心の底にもとまりとりはづしては

ぬすみしやうなる歌も出来べきなりかま／＼てふる」(14ウ)

き集のみを目ならし口ならすべし

# ①(本) 仮名づかひ

仮名づかひの書は契沖法師が和字正濫抄あれど

伊能魚彦が古言梯ばかりたよりよきはなし

されどあやまりおほかればかうがへたゞさでは

用がたし難波にて吾師村田翁海春の校本を

板にゑりたれどそれはたうけられぬことあり

仮名づかひの格は時代によりてかはりあなる」(15オ)

を心得ずして中々にふるきにあやまることあり

そは古事記日本紀の仮名と延喜天曆の代の

仮名とはおなじからず万葉も奈良の朝にくだ

りての歌には古にかはれる書ざま相ましれりから

国にも周易尚書など、さて古き仮名づか

ひとは馬を字万梅を字米諾を字倍魚を

字乎薫を加乎流など書たぐひ也延暦天曆

比の例は馬を牟麻梅を牟米諾を牟陪」(15ウ)

魚を伊乎薫を加保流など書くこと神楽催

馬(出典「案」)東遊風俗古本字鏡和名抄新撰万

葉日本紀竟宴歌年中行事秘抄或ハ貫

之道風佐理行成の句草といふもの、伝は

れるはみなこの定也デヤウこれ音の通へるより一変

せしにて後の定家仮名遣といふひがこと書

のたぐひにはあらずさるを三代集の比の書を

記紀万葉の仮名にあはせて書改んはいにし」(16オ)

へにあやまるにあらずや古調の歌古躰の文には

必記紀万葉の例を用べし三代集より後の

歌文に古仮名を用るは定家仮名遣の誤

におなじくてたゞ後にあやまると古にあや

まるとのけぢめのみ也此論余はやくよりおど

ろかせどへらぬおも、ちして用る人なし近頃

石川雅望が雅言集に覽にこの心を得て書

るは具眼のしわざといふべし」(16ウ)

# ②(本) 定家卿の仮名づかひ

世に定家仮名遣といふものありそを今仮名

といふは古仮名にむかへて近くいひ出し詞也此

仮名遣は大炊助親行が拾遺愚草の清

書せんとて考するせしを孫の行阿が定

家仮名遣といふ名はおほせしなりとぞそは

四声軽重などにならずらへ古書に明証ある

をもしらで作り出しみだりことなればとり用べ

くもあらずくはしきことは師翁海春の仮名大意

抄に論弁せられたればいはず今やんごとな

き御家にて用給へる仮名づかひはおのづから

別に定家卿の伝へ給ひしふかきむねあめれど

いかでかうかゞひしらん必流希(マメ「案」)の定家仮名



遣といふことわりなきものにはあらじ

④(朱) 古学通統

古学とも万葉家ともいふ学のすぢは契沖 「(17ウ)

法師荷田宿祢<sup>ミヤ</sup>を祖とすれどもとは顯

昭仏覚成俊などが眼をひらきしを後に難

波の下河辺長流江戸の戸田茂睡などこれ

に志をよせ契沖法師大に其道をおこせる也荷

田宿祢は契沖に学はれしにはあらねどや、年お

くれたれば契沖の書などを見て目をひらかれ

けんも知べからず賀茂翁<sup>マコデシ</sup>は宿祢の門人なれど

もはら契沖が説を 押<sup>ヒシ</sup> ひろめられぬ賀茂翁の 「(18オ)

門人いとおほき中に本居宣長傑出て天下を

なびかし橘千蔭師翁<sup>ナナ</sup>ありて江戸に鳴た

れば古学は賀茂翁の道となりて実<sup>マコト</sup>に中興

の祖師といふべし余は村田翁<sup>マコデシ</sup>より道を

うけたれば賀茂翁の孫弟なるをもておもて

おこしとし不才をも忘れてひとりゑみす今

誠に道統の系図をつくりて後学にしらし

めんとす 「(18ウ)

○顯昭 法橋 袖中抄撰者  
左京大夫顯輔卿子

○成俊 權少僧都文和年中人

○戸田茂睡 江戸人  
号樂本

○僧契沖 摂津尼崎人号内森庵  
歌学 仏学

○荷田東磨 洛南稻荷  
神学 律令 歌学

荷田在満 称東之進  
律令 故実 歌学

「(19オ)

安藤為章 水戸藩士号年山  
歌学 史学  
今井似閑 京都人 号見牛  
歌学  
海北若冲 浪華人号亭柏  
歌学  
野田忠肃 摂津今津人  
歌学

小山田与清「作歌故実」二種 (一) (今井・松本・山田)

たみ子<sup>(朱)</sup> 歌学

賀茂真測 遠江人号縣居世称副衛士  
神学 史学 律令 故実 歌学

御風 称東藏 歌学

小野古道 歌学

目下部高豊  
俗名今縣定右衛門  
小倉人

加藤宇万枝 号静舍  
歌学  
上田秋成 歌学  
浪華人号午齋

伊能魚彦 下総佐原人称茂左衛門景良  
歌学 画家

村田春郷 歌学  
「(19ウ)

橘千蔭 歌学 書家 画家  
号芳宜園

村田春海 号織錦扇 俗称平四良  
歌学 律令 詩人

建綾足 号涼袋 仙白人  
歌学 画家 俳諧

橘常樹 歌学

高橋秀倉 律令

本居宣長 号鈴屋 歌学  
神学 韻学

荒木田久老 号五十櫻園  
神学 歌学

栗田土満 遠江人  
歌学

内山真龍 遠江人  
歌学

よの子 歌人

紀子歌人  
後しげ子

しつ子 歌人

田中道磨 歌学

横井千秋 尾州藩士  
歌学

服部中庸 袖学  
伊勢松坂与力

上田百樹<sup>(マ)</sup> 神郡学史学  
「(20ウ)

小篠敏 石見浜田藩士  
歌学

片岡芳香 歌人 江戸人  
馬場長英 歌人 江戸人  
井上務廉 歌人 江戸人  
山本正臣 歌人 故実

清原雄風 歌字 正木千幹 歌字 「(21オ)」

○村田春道 歌字 賀茂翁友 俗稱治兵衛 春郷春海父

○橘枝直 歌字 史字 賀茂翁友 千歳父

○富士谷成章 歌字 始名景雄 歌人 京都市

○大村光枝 歌人 彦太良 京都市

○三嶋自寛 神歌字 泉真国 歌人

○小沢蘆庵 歌人 小川萍流 歌人 近江人

○僧海量 近江人 歌人 僧立綱 歌人 近江人 自称賀茂翁門人

○賀茂季鷹 歌人 安田躬絃 歌人 「(21ウ)」 書家

①(本)和歌会披露

和歌の式正会といふことは地下にてはならぬことなり  
そのさまは袋草子八雲御抄などに見えておほ  
かたおほかたおしはからるれど学せんなし近頃の人  
ともすれば式正会と名づけ其式まねぶはいとふよ  
うにてたとへは竜を捕術を学がごとし禁裏仙洞  
撰家などの御会に召れたらんにはその作法その時  
学てたりぬべし地下の会は歌をよみならひ懐紙 「(22オ)」  
短冊など書ならふべき稽古会なれば式正の作法  
しらずてもさであるべし披露といふも宗匠家の  
作法にて他にて惜しまねぶはえあるましきわざ

なりそもく和歌ノ御会の時ハ読師懐紙を披  
きて台に置を講師とりて節なしによむ也  
ハツセイ 発声はその跡にて節をつけてうたふこれ神楽  
のうたひもの、家の家業也くはしきよしは樋口  
秘記に見ゆ 「(22ウ)」

②(本)百首歌

百首歌は堀河院の御時基俊俊頼以下十四人  
の百首を奉らしめ給ふこれを初度百首とも  
太郎百首ともいふ同院の永久四年にまた七人  
の百首を奉らしめ給ふ後度百首とも次郎百  
首ともいへり此後百首の作いと、おほかりそは  
百首都類続百首都類群書類従などに  
収めれば閱て知べしさてそのよみやうは桐火桶 「(23オ)」  
定家卿ノ撰也其底記には蜀ノ本末桐火桶  
此五帖ハ定家の製作の書にあらすといへり  
と申はさだまりてそのすがたあるべし是又大事  
にて家に秘すること也百首にはまづ地歌を  
づらしげなくさつくとよみわたしてその所々  
秀逸めきたる歌をよみまじふる也百首に七  
八首にはすぐべからずしてにしきをいろくにおり  
ませよと亡父の卿ものたまひし也俊頼基俊などは  
百首の歌うけたまはりては四五首々々に呪吟し 「(23ウ)」  
てあんぜられけるにや四五首だにもよまざりければ  
打おきて当日になりて地歌をさらくと口にまか  
てよまれしとや當時も亡父卿西上人慈円など  
にはさやうにのみよまれし也愚問賢注に  
むかしは百首などは地歌をまじへてよむ事と申  
て侍る今の代にはそれまでのさだなし案じと、

のへたるは文となりおちたるは地歌と申べくや云々

耳底記卷上に百首などをよむに心もちあり三十「(24オ)

首ばかりは古事来歴にてよむべしそれよりおほ

くは無用なり是は准シユしてしるべし十首には三首

四首古事コジなども引キ古歌をもひくべし我作意に

てよむにしくはなきなりよみかたの口伝也云々また

問鳥丸光広の問也百首などの哥に二首つゞけておなじ

ものをよむはあしき歟答細川卿心さへちがへばくるし

からず三首はつゞけぬ也云々また昔は百首の歌に

地歌といひて七八十首ほどもすなり云々と二日三日に「(24ウ)

よみてのこる二三十首の哥を一首を十日にも廿日にも

よめり然レとも逍遙院云々今地うたとおもひてよみ

たらば一爰エジわけもなき哥なるべし物スベテを随分案

じてさて今一重案ヒトヘじて二三十首をよむべき也我は

さうよむと逍遙院仰られたると也云々など見

ゆ又耳底記卷中に一夜百首なども稽古にはよ

みて人に見せぬがよきと三光院殿仰られたり

ともあり「(25オ)

### ①懐紙本の始

懐紙はもとふところ紙ともたゝうがみともいへりタビ置て

懐ノ中モに持てる紙なればさは名づけし也空穂蔵開ノ中

に大将文のてんを直ナホすとてあか筆を春宮とらせ

給ひて御ふところ紙にかく書カキて藤壺に奉り給ふ

云々同下に大将ごたちの哥かきつけつる硯のもとに

立よりて筆をとりてふところ紙に書てこしにゆひ

つく云々又御まへなる硯を引よせてふところかみにか「(25ウ)

くかきて打おきて立給ひぬれば云々源氏紅梅に

紅の紙にわかやかに書てこの君のふところかみにとり

まぜおしたゝみて出し給ふを云々枕草子ノ春曙にくき

ものゝ段によべおきし扇ふところがみもとむとて云々

もとめ出てそよ云々とふところに入て云々又春六曙ふところ

紙にたゞすこし春ある心ちこそすれとあるはげに

けふのけしきにいとよくあひたるを云々狭衣二のに姫

君の御あとの方にふところ紙のやうなるものゝおちた「(26オ)

《山槐記治承四年二月十八日の条に光雅朝臣持一参表ノ函二懐紙ハ枚上二置云々

云々同年八月七日の条に予取テ菓子等一入二懐紙二云々

るをあやしうなにごとゝりて御らんすれば白き

しきしなどいへどなべてみゆるさまにはあらぬか云々外此

くたゝみなしてしやくになしてなんとれりける云々

更級日記にをのこのおくりしてかへるにふところがみに

ふところかみのさ思ふべしたゝうがみは源氏空穂落

落有二砂ノ跡一歟云々発心集八の巻四の条の

書しこと見え榮花布引の滝に御扇たゝうがみまでお

ちゝりたるを云々江次第一の巻九に懐中ノ扇置紙云々

たうがみやうのはなむけあまねく心ざしけり云々

狭衣二三のにたゝうがみをさし入てさうじのかねをさ

ぐり給ふ云々空穂ノあて宮に御かゝみたゝうがみは

ぐろめよりはじめてひと具云々などもあり後撰

離別源氏ノ櫛三などにたゝんがみと書たるも「(27オ)

通音也さてたゝうがみふとこはおほかたうすやう

なめるに枕草子ノ春曙心ゆくものゝ段にみちのくに

がみのたゝうがみとあれば後の懷紙に檀紙を

用るはこれによれる也けりは今の檀紙也かゝればいにし

へは懷フツコロなる疊紙タハワガミにかりそめに書たシなるを後には

ことくしき書法などいひ出し也さて今の和歌の

懷紙は多田義俊が南嶺遺稿ウツリのニ卯祭

双紙を引て清和天皇の比歌紙といふものに「(27ウ)

みちのくに紙を用られしこと貞信公の記に見え

てこれ懷紙の始なるよし記し伊勢氏シル貞の

赤鳥アカトリ入江昌喜がくほのすさび巻上などにも

この説をアゲ挙げたれど義俊が引用キしにはとも

すれば作名ツクリナの偽書イッハリフミおほくていとゞうけがたし余が

管見クワンケンには袋草子フクロコの八雲御抄ヤクモのなどに白川

院堀川院の御代の人々の懷紙の事見え北院

御室オムロの左記サキウキ右記ミキウキにも懷紙の事をし「(28オ)

るしたまへりそれよりくだりての書フミにあらはれ

たるはアゲ挙るに違イトマあらず尺素往來の異本に

は通スはして会紙と書きその外にも会紙と書たる

いとおほかり

①本懷紙歌書様

今の世懷紙の書法に九十九三とて初ハジメノクダリ行九字

第二行十字第三行九字終ハテの行三字

といふが通例也されど袋草子(マ)の和歌書様の「(28ウ)

条に三行三字ニ書レ之但シ近代ハス不必シモ然ラ「故老ノ書

墨黒顯然可シ書レ之ヲ不レ可レ執ニ手跡シツス云々八雲御

抄ニの哥書様の条に清輔朝臣ク一首ノ哥は

三行三字墨黒に可シ書ク但シ或三行も吉程歟

兼裁雜談に一首懷紙は三行三字也云々

など見えて九十九三に限りたる事にあらず

明月記に九十九三二水記には八十一八四など

書れしも有て必竟一定せずされと二水記の「(29オ)

終ハノクダリ行の四言は字をまぜて三字に書れたれ

ばいづれも三行三字の式サマシにはたがはず言塵集モジ七の

にも文字くばりのやうによりて書はての三字

には真名字をひとつくはへて三字にも書也真名

は假名にあらぬもの事也ハテといへり又終の三字を真假

名ナに書くことゝのみおもへるもマカびかこと也草假名

にも書き或は四言五言あまれるを字まじり

に三字に書たるも例おほかり余が見聞せる「(29ウ)

古人筆跡の図を末スエにあく愚記文龜二年正月廿五日の条にも

三行三字云々又九十九三云々又末の三字ノ事

不ル加ヘ真名ニ可シ為ル三字ニ依レ人不然今日為広

卿吳多計書ク云々これヤンゴトナキミイヘ摺紳家の御伝

授などいふ深き理フカをうかゞひ知れるしわ

ざならねばいとおこなるものわらへなシめりさは

いへど古書の明証によりて説をなし口伝クデン

秘授ヒジュなどにかゝはらぬが県居翁貞興「(30オ)

の立られたる古学の習風なれば古学者

どちらかうてもとがむまじきわざなるをや

②本真名の懷紙

懷紙を真假名に書る例あり明月記ノ歌道

部類山とにへる条に書カキ高檀紙二枚ニ加クハヘ礼紙ライシ以テ二枚ニ如ク

立文タテフミ「畏レ之ヲ依レ有ルニ存スル旨ニ用ニ此ノ字ヲ

俱礼加多喜計布野所羅

仁所志良礼怒留万津「(30ウ)

者比佐志喜千世能田

目志登

とありこは行書ギョウショにて十九九三と四行ヨウタリに書き女房懷紙のさまに端作ハシツクリも位置ナガキもなく礼紙をかさねて立文タテマのやうに褻ツマれたる也二枚に書れしは歌二首なれば也されど一首のかたは書様をしるされずその歌は

待ほども久しきけふの夕ぐれは契るや」(31オ)

ちよのはじめなりけりと前マへに見ゆ

㊥一首懷紙の図

兼載雜談に一首懷紙は三行三字也云々尊俊

和歌作法目録孟門尊俊が撰にて二卷あり  
天和二年五月の刊本なりに一首の和歌

の懷紙の書やうの事高位貴人又は法中等

季同を書侍らす詠の字より題をはしつくり

に書入て我官位氏名乗を書て哥を端作より

も一字ほと上て三行三字にかくへし初の行九字二行」(31ウ)

目も九字三行め十字さて三字書といへとも哥により

て其内字くはり可被見計義なり位上之衆は

官位はかり書也法中は官位と名乗はかり也

よのつねの人は官位氏名乗ともに書て凡俗は

氏と名乗はかり也云々了俊ノ懷紙式今川了俊和歌懷紙式  
写本一卷有奥書に明徳

三年八月廿五日三代  
作者了俊としるしたるに

しなみてよみにくき文字などを書まざる間よみ

わづらひぬれば歌のためわろき也また文字くはりを」(32オ)

よくかゝんとて文字のするくゝとよみくだされぬやう

に書こともしかるへからぬこと也和字はよみがらに思ひの

外に成事も侍間さやうにわきまへられであし

かりぬべき文字をば真名にたしかにかく也いかほども

哥をばたしかなる文字を書へき也又手かきなどの懷

紙に真名仮名をもてかく事の侍る也講師の為

きはめたる難義也心得てかゝるへきや但その時の

講師にはらぐろの為にわざと難字を書入万葉」(32ウ)

などを書は別義事也さればかやうの役人は才覚大切也

万葉はならひごとなれば一座はきゝおきぬれはその時に

のそみても思ひ出べき也何事も広く見きくはとく

也或人の懷紙に鶏鳴露と書たりしを講師よみ

かねたりき万葉に鶏鳴露と書て曉露とよ

ませたりかやうの事は一度きゝ得たらんには思出

べき也むかし通阿といひし哥仙は才学の人也手

跡いみじく人をはかる心侍りて毎度此人の懷紙」(33オ)

にわづらはしき事ありし間おろくゝの講師は声をもせ

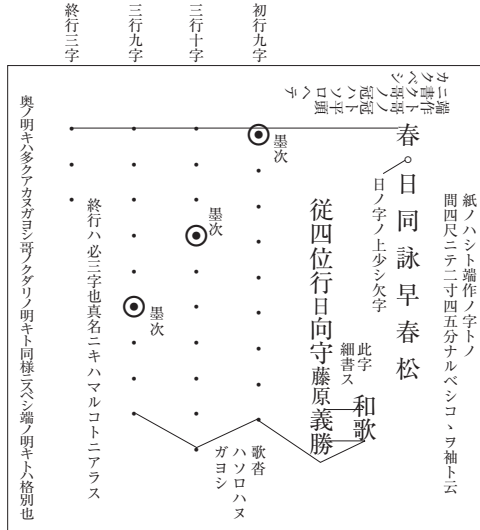
ざりし也云々

(四行分空白)



季同懷紙之図

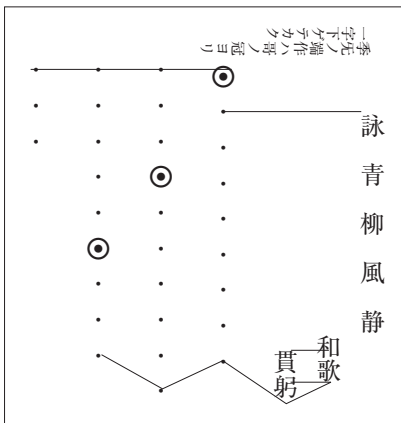
△端作ノ初行ト紙ノハシトノ間曲尺ニテ二寸四五分ナルベシ端作トハ題ガキノ事也  
△春日ノ日ノ字ノ上少シ欠スベシ端作ハ一字云々ニ墨ヲツギクロくろ書ベシ  
△季同ノハンヅクリハ春ノ字ト哥ノ冠ト平頭ニ書ク季書バカリハ半字下ゲ  
季ナレハ一字下ゲ書ベシ  
△名書ハ名乗ノ上ノ字和歌ノ和ノ字ヨリ半字下リ名乗リ哥字モ亦  
歌ノ字ヨリ半字下リナルベシ  
△官位ハ字ノ多少ニヨリテ見ハカラフベシ



紙ノハシト端作ノ字トノ  
間四尺ニテ二寸四五分ナルベシコ、ヲ袖ト云  
△姓ハ藤原氏ハ細書ス他  
姓ハ細書一及バズ  
△哥ノ頭ヲ冠トイヒ下ヲ香  
ト云冠ハ香ヨリモ明キ多ク  
スベシトヘバ冠六分ナラバ  
香四分冠一寸二分ナラバ香  
八分ナルベシ但定リタル寸  
法ナケレバ見ハカラヒテ四六ノ  
ワリニ天地ヲ残スベシ  
△冠ハソロヘテカキ香ハソロハヌ  
ヤウニカク也或ハ第二行  
目ノ香ヲ或ハ下ゲ或ハ上  
ゲナドス  
△墨ツギハ初句ノ頭三ノ句ノ  
頭五ノ句ノ頭ト三処ニテ  
ツグ也

「(34オ)

季無懷紙之図



△季无ノ懷紙ニハ  
姓ヲカ、ズ  
「(34ウ)

右の図によりておほかたは准しるへし僧家児童の  
懷紙その外さまくの体あれとみな端作り名書

の殊なるのみなれは端作りの条に著はしたる図  
を見て心得へし

○書切らぬ字 古真蹟に懷紙に必書切らぬ文字  
あり君千世万代御代齡の類は二行にわけて書

ことなしたとへは初行の終にきと書き次行の首  
にみとかき初行の終に千とかき次行の首に「(35オ)

世と書類也此外亭主の名帝王の御名などの  
字をは諱て書きらぬやうにすへきものをや宣胤卿

記本正三年正月  
十九日の条に

春日同詠鶯知萬春

和歌

権大納言藤原宣胤

三笠山よはふこゑ

あるためしをもきみ

か春そと告るう

くひす

とも見えて仮名

に書たるはあれど  
別行にわけたるは  
例なし「(35ウ)

○日月君の字 古筆懷紙に日月の字君の字

なとはおほく字に書て仮名には書すされと

仮名に書たるも見ゆめり時宜によりて斟酌せし

事なるへし

○賀懷紙の字 賀の懷紙には憂悲涙泣等のい

まはしき字をめてたき仮名に改て書べし古学懷紙

みなさやう也とみゆ

○香冠 歌の上を冠といひ下を香といふ冠は平頭に「(36オ)

そろへて書き香は乱して揃はぬやうに書たるか古体也

冠に文字はかりならひ或は仮名はかり置たるなど  
見くるしかるへし

○墨統 墨つぎは端作は春日と書き続て同詠続て題

又ついで和歌の字を書<sup>ク</sup>也位署は官位はみな黒々<sup>クロ</sup>と書

き兼。行。字。姓。朝臣。などの字は墨をつがずに書く。歌は

十二。十二。七とつぐ也されどかくしつぎとて目立ぬやうにつぐも

常也又字くばりによりて続目一二字たがひてもくるしか<sup>ツギメ</sup>」(36ウ)

らず奥の三字を別につぎて書たるもありすべて時宜に

したがふめれば一概にはいひがたしこれらは古き真蹟の

懷紙を見あつめて立たる説なれば余が私にあらす

○奥の明間 奥の明は多く明たるも書つめたるも

よろしからすおほかた哥一行ほと明たるか古懷紙

の体也端の明の事は端作の条にくはしくいふべし

奥を書つむるは凶事懷紙の例也

○歌の闕字 宣胤卿ノ記<sup>永正四年閏十月二日の条</sup>に自<sup>リ</sup>」(37オ)

濃州<sup>左衛門督基吉</sup>狀到来<sup>ス</sup>先日ノ返事<sup>也</sup>也<sup>有</sup>レ歌

心ある 君にとはれてみとせふる

あつまのたひのうさもわすれつ

彼ノ狀ニ云<sup>ク</sup>歌ニ闕字平出ノ事近代不<sup>ニ</sup>見及<sup>ハ</sup>候公

宴などにも無<sup>ク</sup>其儀<sup>ニ</sup>候歟但<sup>シ</sup>京極黃門建仁

元年ノ之度峯月照<sup>シ</sup>松と云題にて

さしのほる

君を千とせと見心より

松をそ月の色に出ける(この和歌二行分に三行書き)」(37ウ)

とか、れ候此外不<sup>レ</sup>見候御所見ノ事候は<sup>ズ</sup>承度候此

哥黃門自筆ノ懷紙先年於<sup>ニ</sup>此金吾ノ許<sup>ニ</sup>一見<sup>シ</sup>

了誠ニ公宴可<sup>キ</sup>有<sup>ル</sup>故実<sup>ニ</sup>歟平出までは嚴重ノ事<sup>也</sup>云々<sup>マ</sup>

小山田与清「作歌故実」二種 (一) (今井・松本・山田)

也<sup>云々</sup>と有にて欠字のさまなずらへおもふべしまた

和文に欠字せぬよしふもひがこと也古今集の序

を闕字して書ける例ありそのくはしき事は別に

いふをまで(以下空白)

(一行分空白)」(38オ)

⑧<sup>(本)</sup>二首懷紙并図

兼載雜談に二首三首懷紙は二行七字也<sup>云々</sup>

東野州聞書にも十首までは二行七字とみゆ尊俊ノ

作法目録に二首の和歌の会紙可<sup>キ</sup>認<sup>ム</sup>様之事

一首の和歌のごとく俗中には春秋ともに季の字

を可<sup>キ</sup>書<sup>ク</sup>也貴人法中は唯詠二首<sup>ヲ</sup>和歌と書て又一首

の懷紙のごとく端作にはじめの題を書いて後

の題一首を三首の時のごとくに書こともこれありよの」(38ウ)

つねには端作を春日同詠三首一和哥と書て官位

実名をかき題をはしづくりよりも二字ばかりさげて

書てさて哥を二行七字に可<sup>キ</sup>書<sup>ク</sup>也たとへは

夏日同詠二首和歌

権中納言藤原朝臣定家

河上夏月

高瀬ふねくたす夜川の

みなれさをとりあへすあくる

ころの月かけ(この和歌二行分に三行書き)」(39オ)

山家郭公

このさとはまつもまたすも

ほと、きす山とひこゆる

たよりすくすな

右のごとく書した、むべし<sup>云々</sup>今按に端作に口の

九五

歌の題をくはへて某日詠某和歌と書き奥の歌には別に題を拵たるあり又端作に某日詠某

二首和歌と書て別に題をは拵ず歌のみ二首書」(39ウ)たるもありこれはいづれも古き懷紙に見ゆ八雲御抄<sup>巻二</sup>にも一切貴賤普通<sup>二</sup>詠<sup>三</sup>何首<sup>一</sup>和哥又始は書<sup>レ</sup>題<sup>ヲ</sup>て詠<sup>二</sup>其題<sup>一</sup>和哥とて其後每哥書<sup>レ</sup>題<sup>ヲ</sup>普通<sup>ノ事也</sup>とありその図

春日詠二首和歌

藤原〇〇

題

題

此図のごとき古き懷紙を見しことあり藤原の二字は薄墨名乗墨にたり縦は上の句の始と下の句の始と二処也二行七字は初句二句にて一行三四の句にて一行五の句一行也高貴の人桑門などは夏日・春日・などいふ季書もなく戸の源平藤橘なども書ぬこと也其端作の図を左にあらはす

詠二首倭歌

名乗

「(40オ)

夏日詠夏雲和歌

源〇〇

夏風

詠……二首

和歌

名乗

「(41ウ)

また追悼の懷紙も余が所見の古墨跡みな二首也」(40ウ)そのくはしき事は追悼懷紙の条にいふべし

③(本)三首懷紙

三首懷紙は二行七字なるよし東野州聞書兼載雜談などに見え尊俊作法目録に三首懷紙の

事是も二首の和哥のごとく詠三首と有べし自然

邂逅<sup>ミサカ</sup>に題をはしづくり<sup>レ</sup>に書入<sup>レ</sup>侍る義も有べし二行七字なりとあり愚記<sup>文治元年十一月廿三日の条</sup>には冬日同詠三首和歌權大納

言藤原宣胤といふ三首懷紙を載られ永正四年十一月廿三「(41オ)

日の条には三首懷紙書様二行七字如<sup>レ</sup>例と見ゆ古墨痕<sup>フデノアト</sup>の三首懷紙の図<sup>端作墨線など二首懷紙におなし貴人法中の端作も亦同</sup>

秋日詠三首和歌

平名乗

題

題

題

春日詠梅始開倭歌

源名乗

若草

柳風

「(41ウ)

また明月記ノ歌道部類<sup>吉夢の条</sup>に二行に書たる三首懷紙あり東野州聞書に懷紙はしづくりの事詠三首和歌とばかりかれば官と名のりを書て姓をかゝず無官は名乗ばかり也なども見えて必竟一定せざるかごとし

(三行空白)「(42才)

太上天皇幸住吉社同詠三首応製 和歌  
正四位下行・・・・  
寄松祝  
あひおひのひさしきいろもときはにて  
きみか世まもるすみよしのまつ  
初冬霜  
ふゆやくる夢はむすはぬさ衣に  
かさねてうすきしろたへの袖  
暮松風  
あはちしまかくせるなみの夕まくれ  
こゑふきかくるさしのまつかせ

「(42ウ)

詠三首和歌 肥前守名乗  
題  
題  
題

春日詠三首和歌 藤原名乗  
題  
題  
題

此図は東野州、  
問書の説に  
依て新に作  
れる也」

「(43才)

(世)五首懷紙

〈東野州問書に十首までは二行七字に書云々八雲御抄卷二の五首以下は一枚及十首は可レ続テ皆用ニ高檀紙一々〉  
兼載雜談に五首七首の懷紙は一紙に二行づゝに書ッよしいへり△さるに尊俊ノ作法目録には五首の懷紙の時は紙を二枚つぐべし端作ハ二首の和哥のごとし二行七字也二首めの哥をおくの紙二くだりかけ候はねば奥あまりに余ること也と見え余が所見の古き懷紙には二枚に二行七字に書たるありそは紙の続目の上には書ッ初ノ紙に三首目の歌を二行書き続目をこえて終の七字を書きたりき五首七首は二枚十首は三枚つぎ也これを続懷紙といふ  
兼載雜談の二紙に二行に書く図

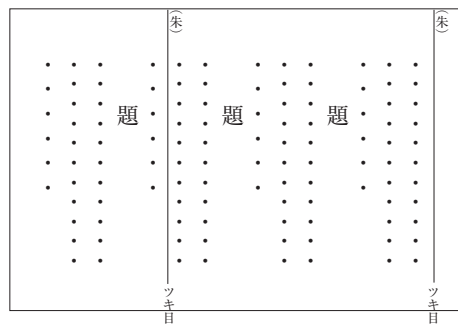
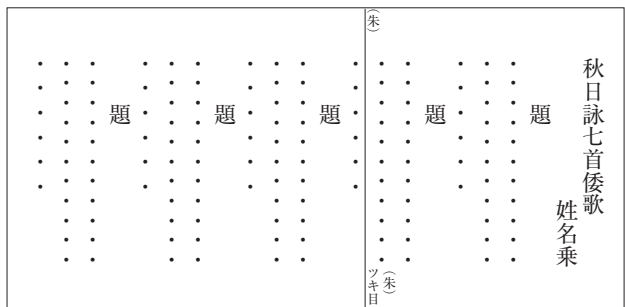
詠五首和歌 名乗  
題  
題  
題  
題  
題

秋日詠五首和歌 姓名乗  
題  
題  
題  
題  
題  
ツギ目  
ツギ目  
ツギ目

此図は今新に作りたる也端作は貴人桑門はかくのごとくなるへし常の人は季書及ど姓をも書加ふべきこと也  
○尊俊作法目録によりて新に作れる図これ懷紙におなじかるべし

「(44才)

古き真蹟の懷紙図

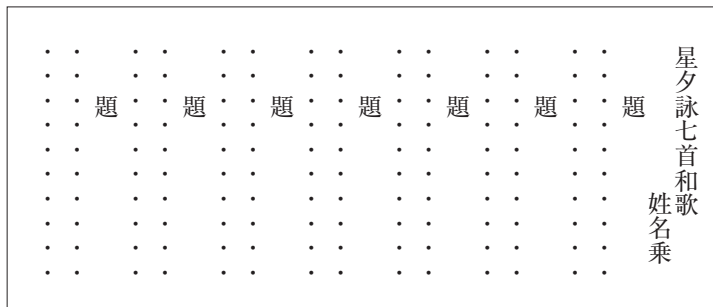


(図下部貼り紙の上に訂正) (44ウ)

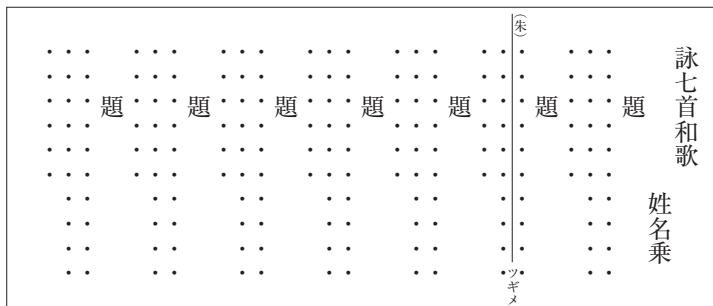
④七首懷紙

七首懷紙は五首懷紙におなじく一紙に二行つゝに書<sup>フタクダリ</sup>よし兼載雑談の説也東野州聞書にも十首までは二行七字に書と見ゆ尊俊<sup>ノ</sup>作法目録には七首の和歌も二枚つくべきなり是より十首十五首二十首三十首五十首百首までもはしづくり右のごとし我名を書<sup>キ</sup>て二首三首のごとくに題にかき哥は上下の句どもおなじとほり書べしと見ゆ余が所見の古き懷紙は二枚にて続目<sup>ツギメ</sup>にかゝず三首目の歌二行は初の紙に書き終<sup>ハテ</sup>の七字は二枚目に書たり五首懷紙にかはることなし

兼載雑談によりて新につくれる図  
一紙に二行に書也

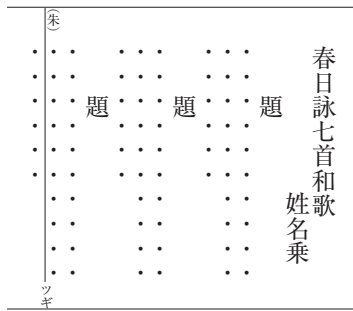


兼載作法目録によりて新につくりし図  
二紙に三行に書也



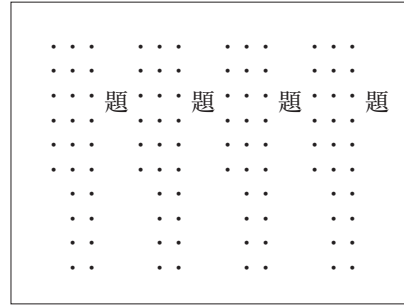
(この図朱の枠)

古き真蹟七首懷紙の図



(上二図朱の枠)  
(45ウ)(46オ)





「(46ウ)」

⑪<sup>(朱)</sup>十首懷紙

東野州聞書に懷紙は十首までは二行七字に書「(47オ)」

十五首にもなれば二行に書<sup>リ云</sup>兼載雜談に五首

七首は一紙づゝなり十首より上は紙をつくくべし<sup>云々</sup>

此両説齟齬して一定せず東野州の説は十首

懷紙まで二行七字也兼載説は五首懷紙以

上は一紙二行にて十首の時は紙を統<sup>ツギ</sup>て二紙二行

也尊俊作法目録には七首の和歌も二枚つぐべき

也是より十首十五首二十首三十首五十首百首まで

も端作右のごとし<sup>(ママ余カ)</sup>我名を書いて二首三首「(47ウ)」

のことくに題にかき歌は上下の句ともおなじとほり

に書べしといへり金<sup>(ママ余カ)</sup>が所見の古人の真蹟には十首

より十五首までは二枚に二行に書たると三枚に

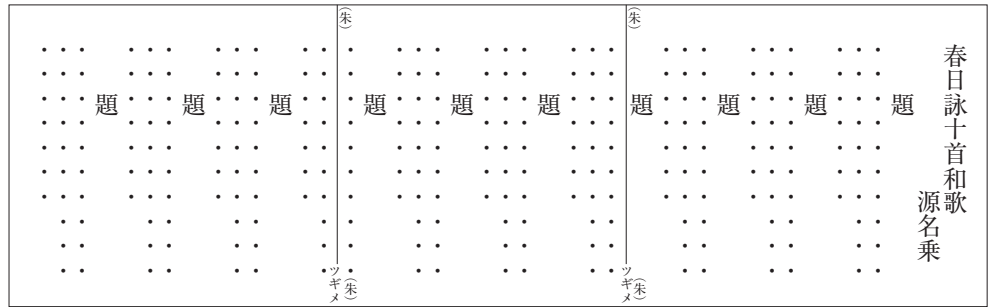
二行七字に書たると二種<sup>フタクサ</sup>ありいづれも紙の統<sup>ツギ</sup>

目には書<sup>カ</sup>ずまた二行懷紙にはもと草として終の

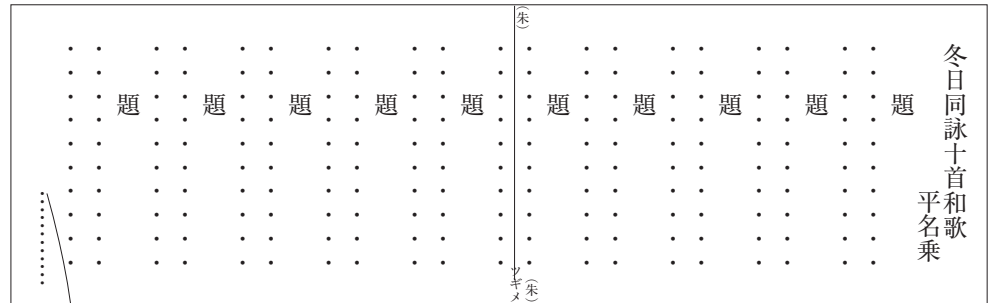
題の下の一を上げて別行に書こと有

小山田与清「作歌故実」二種 (一) (今井・松本・山田)

三枚二行七字の図



二枚二行の図



「(48オ・ウ)」

⑫<sup>(朱)</sup>十三首十五首廿首三十首五十首百首  
千首等の懷紙

千首等の懷紙

十五首より百首までみな二行にて端作は

十首懷紙におなじ紙数は定らず統<sup>ツギ</sup>目の

上に字をかゝぬやうにすべし千首に至りても此定也十五首以上をば巻懷紙マキウシといひ懷紙イチャウシ一卷とよぶまた十三首懷紙ありそは十三夜和歌の懷紙也いづれにももと草あり余が見し古き真蹟は大臣家の御懷紙にて紙のたけ一尺二寸許なりき平人は少し短くすべき事なるをやさて十三首以上千首までの懷紙をばまきくわいしといふ

十三首懷紙

十五首懷紙

九月十三夜詠十五首和歌

姓名乘

● ● 題

八月十五夜詠十五首和歌

姓名乘

題 . . 題

「49ウ」

[illegible]

春日同詠二十首和歌  
姓名乗

題

題

此以下十五首懷紙の順次  
におなしければ省く  
末にもと草あり

甘首懷紙

[illegible]

モト草

冬日詠百首和歌  
 春廿首  
 題  
 題  
 此順に廿首書終て次に  
 夏十五首秋廿首冬十五  
 首恋廿首雜十首など、  
 書也末に例のもと草  
 あり

百首懷紙

題 題 題 題 題 題 題 題

モト草  
└──  
(50才)

「50ウ」

五十首懷紙

姓名乘

題 題 題  
 已下廿首懷紙に同  
 末にもと章あり

姓名乘

春十五首  
題  
題  
此順に十五首書終て  
次に夏十首秋十五首  
冬十首など書つゝ  
くる也末にもと草有

名乗

二百首題

題

已下百首の書方に同じ  
夏百首秋二百首冬  
百首恋二百首雜二百  
首と順に書也末にもと  
草あり

51  
ウ

「懷紙はいかにも結構をつくすべし右記（童形等消息事の条に）に詩歌会時結構懷紙一事至テ武館聖門ニ之所通法トスル也而見懷紙者一涯（チゴ）可（ヒトキハ）存（ケレ）美（ミ）麗（ヨシ）一者也（マダ）も有て男子僧形ともに懷紙を結構し兒女房などは殊に美麗を尽すべし」

小山田与清「作歌故実」二種（一）（今井・松本・山田）

大高小高なとよぶは大高檀紙小檀段紙を略せ

し称也いにしへたゝうがみにこれを用しにより

て也たゝがみは一名ふところ紙にて今も東帯の  
ソクタイ  
 時はたゝう紙とて檀紙を色々に備へたるゝこ  
イロイロ

と故実也とぞ茶人が釜敷紙とて檀紙をたゝ

みて用るもたゝう紙の遣風なるべし又薄様を」(52才)

も用べし薄様は今、俗に薄やうといふものには

あらず厚紙にむかへたる名にて鳥子の厚き

を厚紙といひ薄きをうすやうといへる也これも

色々に渡てふところ紙に用ひそれに歌書る

よし源氏枕草子などその外物語書フミにおほく

見えたれば懷紙に鳥、子を用ん事ひかことに

はあらじされど中比はみな高檀紙に書れたる

よし明月記などすべて諸家の記録にみゆ」(52ウ)

愚記に小高檀紙を用るよしひ了俊懷紙式

にも讃岐檀紙を用といへり今の世奉書紙いに

しへは杉原といふその外さまぐの紙を懷紙に用る人

もあれとえあるまじきわざ也唐紙などに書たら

んはことにひがことなるをや

懷紙端作の事袋草紙卷一の題目書様の条八

雲御抄<sup>卷二の</sup>歌書様の条などに見え東野州聞  
「(53才)

書に懷紙はしづくりの事季の日をかけば姓名

乗をかく只又詠三首<sub>二</sub>和歌とばかりかけば

官と名乗を書て姓をかゝず無官は名乗ば

かり也会所の亭主と同姓ならん人はたとへ季

の日を書とも姓をば不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>書<sub>ク</sub>和哥は亭主を本  
とするゆゑなりともいへり今古書の説により  
或は古真蹟によりて図を作り初学にさ  
とりやすからしむ」(53ウ)

季書春日懷紙

春日詠立春風

倭歌

從五位下彈正大弼源朝臣某

春日の季書には日の字の上おし闕字する也但春日に限る  
事と見えて夏秋冬の季書には所見なしまた春日に  
ても欠字なきもあれは一概にはいふべからず  
すへて季書の懷紙は丁寧なる義にて亭主を貴ふ  
心也季書なきは自己より目下の亭主に對せし時の  
しわざにて失礼也風流の道には失礼をきらふ事  
なれはいかにも丁寧なるべし

季同書春日懷紙

春日同詠梅初開

和歌

從五位下行飛彈守橘朝臣某

季同をかくは亭主格別の高位歟又は高位の人同会  
などの時のしわざ也普通にては書ぬこと也致仕したる  
人は位ばかり書て官をばか、ず

亭主同姓の時の懷紙

春日詠早春松

倭歌

遠江守從五位下某

亭主と同姓の人は姓を書ぬこと也亭主源氏ならば源氏の  
人姓氏を書ず亭主平氏ならば平氏姓をか、ぬ事  
也されと今の世にてはあらぬ人も源平藤の姓を犯す  
めれば一概にいひがたし称号も姓氏も同じし人どち  
省くべしそは平氏にても畠山は畠山小山田は小山田と  
別て亭主も畠山よみ人も畠山ならば省へし亭主は  
小山田よみ人畠山ならんにはぶくべくもあらず

季書夏日懷紙秋冬亦同

夏日詠首夏朝

和歌

從五位下行彈正忠平朝臣某

夏秋冬ともに日の字の上闕字することなし

神前法案懷紙

元日侍

柿本影前同詠

早春梅和歌

從五位銜京亮藤朝臣某

神前法案の懷紙は季同位署書あり神号の上を  
欠字す又題一行にあまる時は次の行の和歌の上にかく  
但二字以上ならては次の行にわけては書す一字は必わく  
ることなし位署書兼官等おはき時は割字に書也

「(54才)

同

重陽侍 住吉社宝前同詠菊

倭歌

從四位下行日向守藤原朝臣某

藤原氏にかきりて姓を細書すること也源平その他  
姓の人は細書し不及何の懷紙にても此定也

「(54ウ)

凡人の懷紙

春日同詠梅花

和歌

藤原某

同

春日詠若草

和歌

源某

同

春日詠春柳

風靜和歌

平某

凡人亭主同姓の時懷紙

星夕詠萩風

倭歌

某

凡人神前法案の懷紙

重陽侍 某神前同詠  
菊花盛和歌  
橘某

官僧懷紙

詠若菜知時

和歌

權僧正某

詠・・・・・

和歌

法印某

詠・・・・・

和歌

法橋某

凡僧懷紙

詠依梅侍風

和歌

沙門某

同

詠・・・・・

和歌

沙弥某

同

詠・・・・・

和歌

某

医師画師同朋の懷紙

詠・・・・・

和歌

名乗

医師画師などの懷紙は無官無位は名乗ばかり  
書也官位あるは官僧の例におなし同朋は名乗は  
かり也いづれも季はなし古真蹟みなさやう也

児童の懷紙

詠・・・・

和歌

某丸

児童の懷紙は季同書なともなく姓氏も  
書ぬこと也凡僧の懷紙におなしく右書は  
某丸と書へし

致仕の人の懷紙

春日詠梅花

和歌

從五位下平朝臣某

致仕とて官を辭したる人は官をばか、ず位のみ書  
こと也端作はすべとおなじ事なれと官名を書ず位  
のみ書こと也古き貞蹟の例也

神社仏寺及遊覧山水之懷紙

秋日於 某社同詠

和歌

左近將監某

神社には於  
字の下欠字  
す

夏日於某寺詠・・・・

和歌

某

仏寺は  
欠字なし

神社仏寺及山水遊覧の時の懷紙

冬日於某処詠夕雪

和歌

河内守某

神社仏寺及勝地名所遊覧の時は欠字位置書に不及  
季同書はすべし官位ある人は官と名乗凡人は名乗ばかり  
書也

夏日遊某山庄同詠初聞

郭公和歌

某

「(56才)

臨時懷紙

灌仏同詠・・・・

和歌

藤原某

涅槃会日遊某寺詠・・・・

和歌

平某

臨時に端作をつくりて書こと有  
此に出せる体に准じて作る  
べし

同

西行上人忌日詠・・・・

和歌

源某

同

定家卿忌日詠・・・・

和歌

橘某

臨時・・・・

於某処翫桜花

倭歌

左少弁某

臨時・・・・

春日陪某候書閣同詠

和歌

能登守某

晚秋於某院詠

和歌

某

秋夜守庚申詠

和歌

某

臨時庚申夜・・・・

同錢・・・・

錢奥州橘使判官

和歌

某

詠梅盛開

和歌

名乗

書捨懷紙

題

名乗

春雪

名乗

同

同はしがきの懷紙

花見にまかり

て

名乗

カキステ  
書捨といふは略義也貴人下輩へ給ふ時又は  
折によりて当座などに書る事も有  
とみゆ

○春日 端作に春日と書時は日の字の上を少し闕  
字せしが古き懷紙におほしたまゝ欠字なきも



見えたればかたくなにおもふべからず夏日秋日冬日」(57ウ)

なとに闕字せしはたえて見ずさて春日夏日なと、季

書をするはことに亭主を重したるわさとみゆ

○同詠季書の下に同詠と書くはたとへは親王

撰家なと、もいひつへきやんことなき御前又は神前

なとの事と見ゆそは明月記愚記なとその他の

記ともに例おほかれは閲て知へし

○題割書 端作り長き時は題の字をわりて二

行に書くとへは春日詠青柳風静和歌と書ん」(58オ)

には春日詠青柳の五字を初行風静和歌の四字

を次の行に書くことにて次の行に題を一字わる

ことなし初行に青柳風と書き次に静とは書ぬ也

二字三字はわりて書たる例あり三字以上わりたるはをさく

見えすまた熟字をもわりて書たる真蹟未見及ば

ねば熟字を割はひがごとなるへし永記大永五年の条に春

日詠花色春と書き次行に久和歌と一字割て書た

るはいと珍し」(58ウ)

○法楽 法楽の時の懷紙は神名の上を闕字す

る也たとへは某日侍と書き闕字して柿本影前或は

聖廟影前なと、書ツ也こは法楽懷紙の条に云べし

○割位署 位署書兼任の官おほくて長き時は

割書にする也たとへは儼位何向守などやうに書也

○同姓の亭主には姓をか、ず亭主同姓ならば

懷紙に姓を省て官位と名乗はかりをかき

無官は名乗致仕の人は位と名乗のみを書べし」(59オ)

たとへば亭主も平氏よみ人も平氏の時のみ也されと今

の世は四姓の人おほくてあらぬ姓氏の人までも

源平藤を称すめればいかにぞやある按に

古書のむねかくのことしといへとも今は一族の同姓

にかきるへくやたとへはおなし平氏にても小山田と

島山は称号別なれば省かす小山田と小山田とは一族

一苗なれば省くべし俗にいはいく一苗字の人どち

は省くこと、定むへきものをや言塵集巻七に当」(59ウ)

御代軍也にては源氏の人は姓氏を略してたゞ官位

と実名ばかりを書也御所御同姓なるゆゑに

おそれ申也とあれどそれは御覧を経る懷紙

などにはさもあるべしかけはなれたる会など

には忌べくもあらずこれことごとく忘たらんには

世に姓なき人のみおほくなりゆきて中々に御

同姓の人少きがごとくていとゆゝしきわざな

るへし」(60オ)

○凡人懷紙 凡人の懷紙は姓名のみにてたとへ

は源某平某なと書也藤原氏は姓を細書し名

乗を太くフかきソ以外は姓も名乗も太く書也

○姓の細書と太書 今の人懷紙に姓名をかくに

なべて姓をほそく名をふとく書ツ事とおぼえたる

はひがこと也姓の字を細書するは藤原氏の末家

の定也そは本家の人の書キ様にまがはざらんため

也本家とは撰政家をまうし末家は自余の」(60ウ)

藤氏の事也さるを源平其外の姓の人も藤原氏

の私の書キ様にならひて書くはいとくものわらへ

なり本家末家の書法伊勢氏文貞の二上峰に

みゆ

○僧の懷紙 僧の懷紙は季同などを書ず詠

某和歌と書き凡僧ならば名ばかり書き或は

沙門某沙弥何某など、書也桑門とは大臣以上の入

法体の時書よし了俊懷紙式にいへり官僧は大僧」(61オ)

正某法印某法眼某法橋某大僧都某な

と書たる真蹟おほかり八雲御抄<sup>卷二</sup>の僧は唯<sup>カ</sup>一官

也法印和尚位などは不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>書凡僧は只名ばかり又

沙弥は或は可<sup>レ</sup>書ともみゆまた仙慶行者の懷紙

ありいことやうなり

(三行分空白)「(61ウ)

詠 歳暮并無常和歌

依競寸陰於迷短慮仍以一首

狂言展二題之奥台且為□

且為恥矣

昔八雲宋流今三密行者仙慶

かくしつ、かさなるとしの

くはてよいかにつひにおいその

もりのしたつゆ

嘉祥三十一—廿五—

年月は後人の書文也  
歳

○児懷紙 兒童の懷紙は季同など書ず名は某

丸と書こと也了俊懷紙或は児のうたよみは童名をな」(62オ)

に丸と書て端作は男と同かるべしといへり北院御室

親王<sup>守憲法</sup>の右記に児懷紙者一涯<sup>チコクワイシ</sup>可<sup>レ</sup>存<sup>ニ</sup>美麗<sup>ラ</sup>一者<sup>也</sup>也無<sup>ク</sup>

風流<sup>タマノ</sup>一直檀紙用<sup>ル</sup>コト<sup>レ</sup>之事無<sup>下</sup>二覺<sup>エ</sup>侍<sup>下</sup>繪檀紙并<sup>ニ</sup>

薄檀紙等其<sup>シ</sup>ノ外色紙<sup>シ</sup>尽<sup>ス</sup>コト<sup>レ</sup>美事不<sup>レ</sup>可<sup>ラ</sup>有<sup>ル</sup>究期<sup>一</sup>と

見えて下<sup>シタ</sup>給書<sup>エ</sup>たる檀紙薄檀紙其外色紙を

用ること古き例也

○致仕の人の懷紙 致仕とて官を辞したる人の懷紙

は端作は例にかはらねと位署書に官をかゝずたとへは」(62ウ)

從四位下藤原朝臣某從五位下平朝臣など、書

也了俊懷紙式には前官の人は散位と書故実也といへり

○遊覧の懷紙神社仏寺及勝地名所等遊

覧の時端作は於某処詠某と書べきよし八雲

御抄<sup>卷二</sup>に見ゆ又遊某所詠某和歌秋日遊某

山庄詠<sup>一</sup>和歌なと書て位署もなく官と

名乗計書たるあり無官の人は名乗のみにて

姓も書ぬこと、見ゆ古真蹟みなしかりさて神」(63オ)

社の懷紙は神社の上必欠字あり仏寺には欠字

なし於の字遊の字いづれにても時宜に依べし

○臨時懷紙臨時に題を作ることあり庚申夜

或饞別等の端作もこゝに出す

○一首懷紙 一首懷紙の端作はいづれも二

行なり春日詠某と書き次の行に和歌と

書也季書の有無にかゝはらすみなこの定也

と見えて古真蹟みなしかり」(63ウ)

○二首以上の懷紙 二首以上の懷紙の端作は

みな一行也詠二首和歌詠三首和歌など、一

行に書下す也了俊懷紙式に詠の字をば上より

一寸二分ばかりさげて書也むかしは詠の字と二首

三首など書をば少闕字ありき当世は欠字有べ

からずといへり

○季同 季同といふは春日同詠夏日同詠な

と書事也その時は端作の頭と歌の頭と高低なく」(64オ)

平に書事と見えて古真蹟にさあり季同を

書くは格別の尊敬なれば大かたの所にては書へからず

○季書 季書といふは春日詠秋日詠など書て  
同の字を省る也此端作は歌の頭より少しさげて  
書るが古真蹟の例也さて古き真蹟に春日

夏日秋日冬日などはもとよりにて元日三月三日  
五月五日七夕星夕秋夜重陽重九晚秋

歳暮など書たるありさては子日 人日 上巳」(64ウ)  
端午 中元 八朔 冬至 庚申夜なども書へきことわり  
なり季書は祝儀也敬也高貴の亭主のもとに

て書へし同輩以下の会には書ぬこと、見ゆされと  
亭主を賞翫するが風流の常なれは今の世にて  
は書てもさりなん十五夜十三夜などの会は亭主  
にか、はらず月をめて、秋夜詠と書たる事とおぼゆ

○端作書初 端作の書はしめは古き真蹟  
の例はおほかた檀紙のはしより曲尺にて式寸」(65オ)  
四五分なり余が見あつめし懷紙二寸三分より六

七分に及へるもまゝありて一定せずされと二寸四五  
分なるかいとおほかり了俊懷紙式には懷紙書

様は袖は手打おくほどおきて書也といへり袖とは端の明  
間の事也二首以上の端作もみなこの定也二水記大永五年三月の条

には高サ一尺三寸二分端作ノハシ三寸五ト計也といひたれど  
そは臨時の事にてまねびがたし」(65ウ)

袖ノ間二寸四分ナルベシ  
春日詠・・・・・

和歌

○端作文字 端作は墨黒にかく季書にてつぎ

同詠にてつぎ題にてつぎ和歌にてつぐ也続懷紙は詠  
にてつぎ何首にてつぎ和哥にてつぐ位置書は官位は  
みな墨ぐろに書き兼行守姓朝臣等の字は墨を  
つがずに書也又かくしつぎとて目に立ぬやうにつぐ」(66オ)  
ことはいづれの字にてもくるしからず

○倭和歌哥調等の字 はしつくり倭歌倭  
哥倭調和歌和哥和調など書たる真蹟いと

おほかり古今榮雅抄本番序注に和は倭の字と  
音通するゆゑに書り正義は倭を書へき也云々また

歌とは和国の風なれは和歌といふ也歌の字哥歌  
の二字心おほし正字は歌也定家卿自筆の懷紙  
に調の字を書れたる也言塵集七に和哥と云」(66ウ)

《徹書記物語に和歌の字をも中比二条家には歌の字をかき冷泉家には調の字を  
書と申侍りし也別にさやうにかならずかくべきにもあらずおのづから御子左家  
には歌の字を書冷泉家には調の字を書給ひしをかやうに申ける也人篇の倭の字  
和とをおなじこと也さりながらにもめにたつはあしくたゞ人にかはらすした  
るかよき也》

字も為世方には必歌此字を被<sub>レ</sub>用也為相方には調を  
も通用也是も定家卿懷紙を尊ふと云々勅撰

の和歌の字は皆此哥と云々為世の方の説也但倭  
成卿の自筆の千載集には調此字を被書たり

など見えていつれに書てもくるしからぬこと、見ゆ  
九經字様の欠部に歌云々調云々二ナガラ詠也（この行小字）

○端作闕字 端作の欠字は応製禁裏仙洞の仰  
応令皇后東宮などの仰也 応命親王内親の仰也 応教親王内親の仰也 応軍家などの仰也」(67オ)

春日の日の字の上侍中殿などの侍の字の下など

必闕字す

春○日侍○中殿同詠・・・・

応○製和歌

参議従三位行左近衛権将藤原某上

○の題少し欠字する也かゝる  
端作には名乗の下に上  
の字を書り

また神前の懷紙も柿本影前聖廟影前などの

類柿の字聖の字を欠字す仏閣は欠字なし」(67ウ)

秋日侍 住吉杜宝前同詠・・・・

和歌

冬日遊長樂寺同詠・・・・

和歌

○未公文勘公文 未公文といふは国司四年の任  
はてゝのほりたるか未その国の勘定皆済せざるを

いひ勘父父は任限の中悉年貢の勘定済たるを

いへり未公文の前司ハ前司ハ前司の義也受領をかき勘公文

の前司は位はかり書也たとへは未公文は前信濃守」(68オ)

従五位下平朝臣某勘公文は散位従五位下平朝臣

某たと書也

○二字題三字題 季同なくて詠梅花和歌

詠菊始開和歌などやうの短き端作は一行に

書たるか古体也室町の末の比より和歌を次行に書こと

普通になれりとみゆ次の行に引下て書ゆえ題の

字と和歌の字との間あきてみゆる也

古体

同上

詠・・・・・和歌

詠・・・・・和歌

」(68ウ)

中昔より後の体

詠・・・・・

和歌

同上

詠・・・・・

和歌

○名乗 名乗は端作の和歌の字と歌の初  
行との真中に和歌の字より半字さげ書

たるか古真蹟におほかり宣胤卿記文龜二年正月廿五日の条には

名字は哥より少しさがるべしとみゆ官位姓は

その上に書ことなれば実名の書処を定て書へし」(69オ)

春日詠・・・・・

和歌

名乗

名乗の上の字和歌の字より半字下り  
下の字は歌の字より半字下る也

○経文端作 東野州聞書に経文の時の端

作のやう

季日聴講法華經同詠

不輕品和哥

名乗

とあり余か見し古真蹟には詠法華經序」(69ウ)

品和歌詠藥草論品和歌春日同詠安樂行

品和歌など書たりき和歌の二字はいつも別行

にて一行にはあらず

○もと草といふは二行書十首以上の懷紙にある

こと也卷軸の歌の下を句を別行にさけて書

こと也そは

きり／＼すなくや霜夜のさむしろに

ころもかたしき

ひとりかもねむ」(70オ)

かやうに末の一句を別行に書こと也古き懷紙には十首以上百首までみなこの定也千首も同様なるへし

○当官前官 言塵集<sup>卷七</sup>に前官の人は前<sup>ナニガシ</sup>

某<sup>ナニガシ</sup>とも書也但<sup>シ</sup>大臣より始めて四位五位の人々も前

官に成たるは散位某と書べしと<sup>云々</sup>当官

の程は其官を書いて姓と実名とを書也先官

になれば位と実名と書がよき也或は従五位」(70ウ)

下とも従五位上とも従四位下など、も其位に

随て書也とみゆ未公文勘公文なども似たる

事なり

(五行分空白)」(71オ)

松屋のあるしよりこひえて

文政八酉年む月うつす たせ

(六行分空白)」(71ウ)

作歌故実 二<sup>止</sup> (外題)

作歌故実 二卷之内「卷之内」は函架番号ラベルの下」(扉)

作歌故実卷之二

目録

①懷紙かさねやう<sup>并</sup>とち様

②懷紙寸法

続懷紙卷懷紙の料紙

③晴の時

中殿御会

披講読師」(1オ)

④白紙を置

⑤秀歌に劣のかへしせず

⑥秀歌ある席にて劣の歌をよます

⑦追悼懷紙

⑧法楽懷紙

懷紙の闕字

⑨歌道の養子

⑩哉の字」(1ウ)

⑪寿の仮字

⑫仮名句題懷紙

⑬続歌

⑭続歌懷紙

⑮唐紙に歌かく

⑯懷紙の礼紙

⑰旅道

⑱儒家。医家。画家。同朋。坊主。茶道。盲目。」(2オ)

坊官。などすべて僧形の人は和歌に名

乗を用ず

⑲法師姿の歌読<sup>并</sup>総髪<sup>の</sup>歌読

やろうあたま よほろ 月代

髪を剃る事

⑳冠置字の歌

㉑天地の歌

㉒杳冠置字の歌」(2ウ)

㉓折句<sup>并</sup>杳冠折句

㉔当座の哥おほくよます



⑤会席に装束引つくるふ

⑥屏風障子などの絵を新によむやう

⑦男女互にその心になりて哥よむ

(三行分空白)「(3才)

(半葉空白)「(3ウ)

作歌故実

①懷紙かさねやう并とち様

言塵集<sup>七</sup>に懷紙は下臈次第にかさねて上臈

は次第の上に重ねるよし見ゆ重てとちんには上

臈下臈女房僧徒と順次すべし兒懷紙は

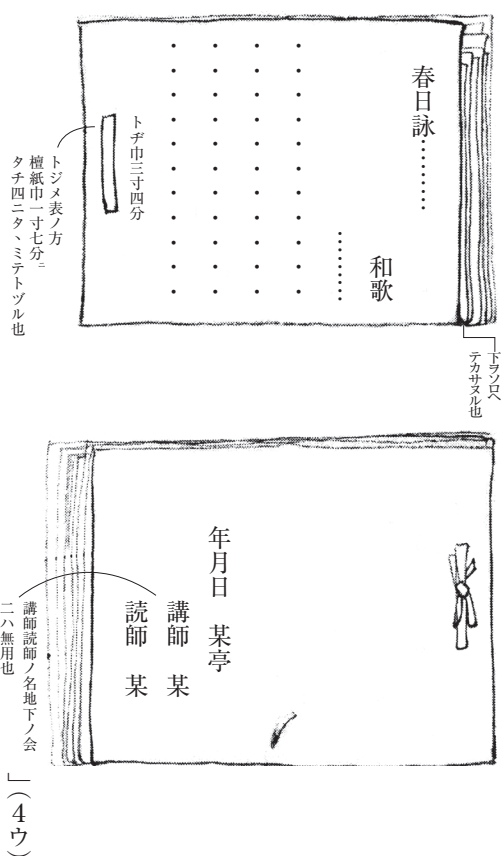
女房の中に入べしさてとち緒には檀紙を幅

一寸七分にたちそれを四にたゝみて用る也懷紙

の裏に年月日会亭講読師等の名を書<sup>ク</sup>「(4才)

ことなれと地下の会に講読師あるべくもあらねば

亭名のみにてしかるべし



小山田与清「作歌故実」二種 (一) (今井・松本・山田)

古くとちたる懷紙のやうみなこの定なり尊俊、

作法目録には懷紙とちやうの事むかしはさま

ざまにとち候へとも先ッ紙のはしと奥とを穴を

たてざまに小刀にてもふうしにても引合を一寸三

四分にきりて四ッにたゝみてかたわれにむすび候べ

し又とち紙を三ッにたゝむ事も有<sup>レ</sup>之わなを

上になるやうにむすび候懷紙おほく候ときは

又とち紙のこしらへ様口伝有ことに候也とみゆ懷「(5才)

紙をとづること三首までにや四首以上にとちたる

をばたえて見ず

③懷紙寸法

尊俊作法目録に懷紙の料紙上臈中臈下

臈によりて寸法有<sup>レ</sup>之御製は大高檀紙一尺

四寸あまり有をそのまゝあそばさるゝ也大臣公卿

までは壹尺三寸を被<sup>レ</sup>用義也殿上人は壹尺三寸

の内を壹尺式寸四分に切て用<sup>レ</sup>之又小高紙とて「(5ウ)

壹尺式寸有を普通には公卿殿上人も用也武士

の人は壹尺三四分に切て用<sup>レ</sup>之いさゝか過分の事

不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>然<sup>ル</sup>此義はみな懷紙の長さをいへり広さ

も天子関白大臣公卿までは紙の法令次第たる

べく候殿上人よりは其相応にひろさをすすこし

つゝめらるへく候法中も門跡院家出世坊官

平僧其位にしたがひ候へく候と見え古き真

跡の伝はれるもおほかた此定也されど普通の「(6才)

人は壹尺一寸七八分より壹尺一寸位なるかおほし

格別に短ッしては小懷紙にまぎれんの用意に

や壹尺壹寸ほどより短きはいとくまれなりま

た浅官の人中高をそのまゝにて用たる有る  
 俊懷紙式には讃岐檀紙を一尺二寸に長を切  
 て用貴人主人などの御懷紙よりも長きは尾  
 篋の事なれば或は一尺一寸ばかり或は一尺ばかり  
 にも長をつむるを故実とすといへり二水記大永五年三月の条「(6ウ)  
 には高檀紙二枚ヲ重テ書<sup>レ</sup>之高サ一尺三寸二分。端  
 作ノハシ三寸五分計也高檀紙聊ヒロキ間一寸アマリ  
 縮ナリ檀紙寸法古今無<sup>ニ</sup>定様<sup>一</sup>云々と見たれ  
 と此説は取捨あるべきこと也

普通の懷紙料紙

天地一尺一寸七分八分  
 を限とす一尺一寸位  
 なるへし  
 横は時宜による定  
 れる寸法なし

武士の家の懷紙料紙

天地一尺三四分とはいへ  
 と一尺一寸余なるへし  
 横は時宜に依る定め  
 る寸法なし

「(7オ)

○<sup>ツキ</sup>統懷紙<sup>マキ</sup>卷懷紙の料紙 五首七首は二枚つ  
 ぎ十首は三枚つくこれをつぎくわいしといふ十五首  
 も三枚つぐ廿首以上は千首に及<sup>フ</sup>までもよろしき  
 に従ふ余が見しは大臣家の卷懷紙にて天地<sup>タテ</sup>  
 壺尺式寸ばかりなりき平人はそりより少し短  
 くすべきにや統懷紙卷懷紙ともに檀紙に  
 限らず鳥子<sup>トリノコ</sup>の色紙<sup>イロカミ</sup>などに書たるもまゝ、古筆  
 にみゆ八雲御抄<sup>ハヤカミ</sup>には五首以下は一枚也及<sup>ハ</sup>十首<sup>ニ</sup>可<sup>シ</sup>「(7ウ)  
 統皆用<sup>ツ</sup>高檀紙とあり

③晴の時

歌に晴の時といふは中殿御会の時の事也さるを  
チウテンコフワイ  
 私の家の稽古会に晴などいふは有ましき事  
 也惣て地下に歌ノ会と称するは僭偽なれば必  
 稽古会といふべしされは披講。講読師の沙  
 汰には及<sup>ハ</sup>ざる也式正会などゝてするは狂惑の  
 者のしわざなるをや中殿御会といふは清涼殿  
 にて行はせ給ふ也天喜四年三月廿七日より後あ  
 また、びありしこと中殿御会部類記晴ノ御会部  
 類記古今著聞集十四ノ神皇正統記の村生雲井の花  
 などに委し中殿は清涼殿の一名にて本殿西宮  
 御殿延喜式日本記略北山抄  
江家次第拾芥抄名目抄路寝文粹など申も此御  
 殿の事也中殿の二字いづれも清て読<sup>ヨミ</sup>説  
 法なりとぞ秘記

④白紙を置「(8ウ)

袋草子<sup>(マ)</sup>の置<sup>ニ</sup>白紙<sup>ヲ</sup>作法の条に題目并<sup>ニ</sup>位置  
 計ヲ書テ諸人ノ哥<sup>ヲ</sup>置<sup>ク</sup>之後<sup>ニ</sup>置<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>逐電ス不<sup>レ</sup>ス居<sup>ニ</sup>  
 講席ノ之座<sup>一</sup>云々。雖<sup>トモ</sup>達者<sup>ト</sup>臨<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>古今有<sup>ニ</sup>如此ノ事<sup>一</sup>寛  
 平法皇宮ノ滝遊覧ノ時源ノ昇ノ朝臣。在原ノ友于ノ  
 朝臣行平中置白紙<sup>一</sup>云々記<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>即<sup>チ</sup>善朝臣献<sup>ニ</sup>其  
 題ノ哥<sup>ヲ</sup>云

やたがらすかしらにおきてしの、かみ句の末に  
 おき題の哥よめ。侍臣等題ヲ聞テヨリ口食并<sup>ニ</sup>「(9オ)  
 管絃ヲ忘<sup>レ</sup>昇友于起居沈吟<sup>ス</sup>遂<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>成<sup>ル</sup>大<sup>ニ</sup>歎<sup>シ</sup>テ曰  
 臣等哥ノ興非<sup>レ</sup>及<sup>ハ</sup>於<sup>ニ</sup>如道等<sup>一</sup>歟。然<sup>シ</sup>而<sup>シ</sup>臣等頗<sup>ル</sup>  
 知<sup>ニ</sup>和歌ノ道<sup>一</sup>善<sup>シ</sup>惡<sup>シ</sup>今夜謀窮<sup>リ</sup>力屈<sup>シ</sup>遂<sup>ニ</sup>悲<sup>ニ</sup>其<sup>一</sup>  
 惡<sup>ニ</sup>如道等不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>其<sup>一</sup>道自<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>レ</sup>善<sup>ニ</sup>悲哉<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>知

道者ノ之風ト或ハ兩人所<sup>ノ</sup>宣<sup>ス</sup>甚<sup>ク</sup>大理也<sup>也</sup>也以<sup>レ</sup>道言<sup>ハ</sup>之<sup>ヲ</sup>其<sup>ノ</sup>  
有<sup>ニ</sup>兼名<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>耻<sup>ハツ</sup>哥<sup>ニ</sup>者耳<sup>ノ</sup>有<sup>レ</sup>リト興<sup>云々</sup>故人語<sup>テ</sup>云<sup>ク</sup>

先年殿上人々詠<sup>ニ</sup>和歌<sup>一</sup>之間泰憲ノ民部卿參入

有<sup>レ</sup>興之由人々被<sup>レ</sup>示<sup>サ</sup>而<sup>ニ</sup>称<sup>ニ</sup>急々ノ由<sup>一</sup>欲<sup>ニ</sup>退出<sup>一</sup>人々留<sup>ム</sup>」(9ウ)

之<sup>レ</sup>戸部云<sup>ク</sup>進<sup>ニ</sup>置<sup>テ</sup>和歌<sup>一</sup>可<sup>ニ</sup>退出<sup>一</sup>人々承諾<sup>ス</sup>仍<sup>テ</sup>

和哥ヲ書<sup>テ</sup>封<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>退出<sup>ス</sup>披<sup>キ</sup>講<sup>ノ</sup>之期<sup>ニ</sup>開<sup>レ</sup>ク之<sup>ヲ</sup>処位

署并<sup>ニ</sup>題許<sup>ヲ</sup>書<sup>テ</sup>奥<sup>ニ</sup>書<sup>テ</sup>云<sup>ク</sup>於<sup>ニ</sup>和歌<sup>一</sup>者<sup>ニ</sup>可<sup>ニ</sup>追<sup>テ</sup>

進<sup>ス</sup>人々感<sup>ニ</sup>歎<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>且<sup>ニ</sup>者不<sup>レ</sup>安<sup>一</sup>之由<sup>云々</sup>凡<sup>ソ</sup>得<sup>シ</sup>名<sup>ヲ</sup>

人ハ中々ノ事云<sup>ヒ</sup>出<sup>ン</sup>ヨリハ通避スル<sup>一</sup>ノ事也<sup>云々</sup>八雲

御抄<sup>卷ニ</sup>に抑<sup>々</sup>置<sup>ク</sup>白紙<sup>一</sup>には題目階官職ノ名皆

書<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>哥許<sup>ヲ</sup>を不<sup>レ</sup>書置<sup>テ</sup>逐電<sup>スル</sup>也寛平宮ノ滝

御覽ノ日在原ノ友于<sup>行平</sup>又源ノ善有<sup>ニ</sup>此事<sup>一</sup>友于ハ白<sup>」</sup>(10オ)

紙ノ作法如<sup>ク</sup>注<sup>ノ</sup>注とは姓名をも將ず有<sup>注など、書クこと也</sup>善ハ書<sup>ク</sup>上ノ句許<sup>ヲ</sup>云々

昔シ侍臣講<sup>ス</sup>哥<sup>ヲ</sup>于<sup>レ</sup>時泰憲自然<sup>ニ</sup>參<sup>ル</sup>泰憲被<sup>レ</sup>勸<sup>ス</sup>

之<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>退<sup>下</sup>披<sup>見</sup>書<sup>ニ</sup>題并<sup>ニ</sup>位署<sup>一</sup>奥<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>哥<sup>一</sup>

者追而進<sup>ス</sup>と書<sup>リ</sup>時人尤感<sup>ズ</sup>不堪<sup>ノ</sup>人ハ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>然<sup>ル</sup>

近日愁<sup>ニ</sup>連<sup>ニ</sup>スルハ卅<sup>一</sup>字<sup>一</sup>還<sup>テ</sup>懷<sup>キ</sup>耻<sup>ヲ</sup>尤<sup>モ</sup>見<sup>キ</sup>苦<sup>キ</sup>事<sup>也</sup>也近代不<sup>シ</sup>テ

レ書<sup>ニ</sup>位署題<sup>一</sup>唯<sup>タ</sup>退<sup>下</sup>多<sup>キ</sup>ハ有<sup>レ</sup>恐事<sup>也</sup>也<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>詠<sup>ハ</sup>須<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>

白紙ノ作法中山内府は家中興遊酒宴などの

次には毎度古哥の上ノ句を書いてといひし人もおもひ<sup>」</sup>(10ウ)

出らると毎度に書<sup>ク</sup>尤<sup>モ</sup>優<sup>ニ</sup>にやさしき事也誠<sup>ニ</sup>可<sup>シ</sup>

是中々見<sup>キ</sup>苦<sup>キ</sup>新哥ハ左道ノ事歟たとへば君が代

はつきじとぞ思ふ神風やといひし人も思ひ出ら

る、也其哥は随<sup>ニ</sup>時<sup>一</sup>景氣<sup>一</sup>也<sup>不</sup>詠<sup>ノ</sup>人ハ中々さばくと

不<sup>レ</sup>詠<sup>セ</sup>也花見ノ御幸<sup>ニ</sup>通季卿題<sup>ニ</sup>こひのうたを

書<sup>ク</sup>又八十嶋<sup>ニ</sup>実教も令<sup>レ</sup>書家隆<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>非<sup>レ</sup>耻<sup>レ</sup>優<sup>ナル</sup>事<sup>也</sup>トヘリ也

古今著聞集<sup>和歌部</sup>にいつの比の事にか殿上の

人々哥よみ侍けるに泰憲民部卿参りあひたりけれ<sup>」</sup>(11オ)

は各興有て思へりけるに志の事有て退出すべきよし

申されけるを人々ゆるさざりければさらば和哥をま

ゐらせおきて身のいとまをは給はらんと申されければ

各承諾ありけり即哥を書封じておきて退出せられ

にけり披講の時これをひらき見るに位署并

題ばかりをかきて奥書に於<sup>ニ</sup>和歌<sup>一</sup>ハ追而可<sup>レ</sup>進

と書たりけり大かた名をえたる人は中々なる事は

あしかりぬべければのがる、一の事也秀歌におとりの<sup>」</sup>(11ウ)

返しせずといふも故実なるへし白紙をおく

事は作法有<sup>ル</sup>事也題位署ばかりを書て諸人の

哥おきて後これを置て逐電して講席の座

にゐざるとかや寛平法皇宮ノ滝御覽の時源昇

朝臣友于ノ朝臣白紙を置たりけり<sup>云々</sup>言塵集

巻<sup>七</sup>に白紙といふ事いかなる達者上手も哥に

よみおくれたる当座に読出しかねたるには白紙の

ま、にて捨て退出口惜<sup>キ</sup>事と<sup>云々</sup>如此の時故実<sup>」</sup>(12オ)

の口伝有也其題に相叶たる古を書て我名を

は書ずして出すへしといへり又は題の心に似合

たる古哥を書てかやうによみたりし昔の人も

有けりなど、も書と<sup>云々</sup>又其題の面に猶愚

詠は追<sup>テ</sup>可<sup>レ</sup>進也と書<sup>ク</sup>も一すがたなりと<sup>云々</sup>此

等は基俊俊頼等の先達の口伝也是を白紙の

哥よむとは云也はれの哥大事の哥など詠<sup>ム</sup>には

その前よるひる女ト会合大酒等を可<sup>レ</sup>略と<sup>云々</sup><sup>」</sup>(12ウ)

此外白紙を置<sup>ク</sup>事所見おほかれど引出ず右

の文どもを考て知べし







中秋彼岸日侍某寺 釈迦如来宝前詠：

．．．．和歌

姓名乗

右の図中には古<sup>フナフナ</sup>墨痕によれるもまた古<sup>キ</sup>例に依

て余が考<sup>ヘ</sup>造れるもあり神前<sup>社にて</sup>用<sup>用</sup>前<sup>前</sup>影<sup>影</sup>前<sup>前</sup>

用<sup>用</sup>宝前<sup>宝前</sup>尊前<sup>尊前</sup>御前<sup>御前</sup>仏前<sup>仏前</sup>影前<sup>影前</sup>に用<sup>用</sup>

などの字そのをりによりて用ゆへしすべて

かゝる端作は例に依て新に考<sup>ヘ</sup>作ること八雲 「(19ウ)

御抄<sup>二</sup>の御説也宝前<sup>二</sup>影前<sup>二</sup>法楽<sup>二</sup>な

どの義余已に神祇称号考にいへりその外

は注釈をまたすして知べしさて侍<sup>シ</sup>座<sup>座</sup>に

て御座<sup>ゴザ</sup>の側<sup>ホトリ</sup>につゝしみ侍<sup>シ</sup>義<sup>義</sup>也陪<sup>バイ</sup>從<sup>シ</sup>に

御座<sup>ゴザ</sup>の側<sup>ホトリ</sup>につゝしみ從<sup>シ</sup>義<sup>義</sup>也

⑨歌道の養子

兼載雑談に俊成卿の嫡子に兵部卿家長と

いふ人有<sup>マ</sup>しかど無器用なるにより寂蓮を歌 「(20オ)

道の養子にせられし也その後定家といふ

子出来て後寂蓮は斟酌せし也寂蓮は俗

名中務少輔定長といへり養子は神代紀<sup>巻上</sup>

に天照大神の素盞鳴尊の御子を養給ひ

しを始にて続日本紀<sup>二</sup>の巻飯寧<sup>二</sup>令<sup>二</sup>義解

などにそのよし見え後漢書<sup>二</sup>順帝紀<sup>二</sup>五代史<sup>二</sup>

唐<sup>二</sup>太祖<sup>二</sup>家人伝<sup>二</sup>などかく書の所見候あけつ

くしがたし 「(20ウ)

⑩哉の字

世になま古学者だつ人かなに哉<sup>サ</sup>の字<sup>カ</sup>を書を

いみしきあやまりと思ひたるはわらふにたへぬこと

也鎌倉室町の比の人の自筆のものに書たるは

挙ていふべからず万葉集<sup>七</sup>のに君為浮沼池

菱採我染袖沾在哉またの十<sup>十</sup>公目見欲是

二夜千歳如吾恋哉また同行々不相妹故

久方天露霜沾在哉などの加毛は後の加 「(21オ)

奈におなじきよし賀茂翁あげつらひ給へり

又顯宗紀に美飲喫哉此云<sup>二</sup>于魔<sup>二</sup>

羅你烏野羅甫屢柯佞とある柯佞

も通音にて加奈におなじこれらにより

て哉の字を用ふことなてふことかあらん

⑪寿の仮字

須の仮名に寿の字をかくは鎌倉將軍の比

より後の真蹟にいとおほく宣胤卿記<sup>月十九日の条</sup> 「(21ウ)

には懷紙に字久比寿とも書れたり又十王経に

樹有<sup>二</sup>荊棘<sup>二</sup>宛如<sup>二</sup>鋒刃<sup>二</sup>鳥栖<sup>二</sup>掌<sup>二</sup>一<sup>一</sup>名<sup>二</sup>無常鳥<sup>二</sup>

二名<sup>二</sup>拔目鳥<sup>二</sup>我<sup>レ</sup>汝<sup>レ</sup>旧里<sup>二</sup>化<sup>二</sup>成<sup>二</sup>テ<sup>二</sup>鸛<sup>二</sup>鸛<sup>二</sup>示<sup>レ</sup>怪<sup>二</sup>怪<sup>二</sup>語<sup>二</sup>

鳥鳥<sup>二</sup>示<sup>レ</sup>怪<sup>二</sup>怪<sup>二</sup>語<sup>二</sup>鳴<sup>二</sup>阿和<sup>二</sup>薩加<sup>二</sup>一<sup>一</sup>ともみ

ゆ無常鳥は杜鵑にて別都頼宜寿は鳴声

也江談抄四俊頼口伝死手の山こえ来る鳥

といふ<sup>拾遺ノ哀傷童蒙抄ノ八</sup>に依て無常鳥と名を 「(22オ)

まうけたり拔目鳥は鳥也死人の眼などほり瞰<sup>ハム</sup>

ゆゑにさいふ名おほせぬ阿和薩加は鳥の鳴<sup>ハム</sup>声

也ふるく許呂久となくよいいへるも<sup>後集ノ十四卷異記ノ中</sup>

加良須<sup>カラス</sup>の通音也十王経は円融一條な

との御代に偽作せし物にて安然和尚の抄



物顕昭か袖中抄日蓮坊の十王讃歎抄

暦応の比の暮露云々草子源氏、河海抄な

どにも引用たればいと古き書也またうけれ  
ぬ書なれど大同類聚方化は遺方などの仮名  
にも寿の字をおほく用ひたりき

① 仮名句題懷紙

仮名句題の懷紙は内々のこと、見えて季書同詠  
などもなく必<sup>ズ</sup>二首以上也飛鳥井雅親卿の抄に  
貫之のかな句題の沙汰ありされど貫之の真蹟  
伝はれるにはあらず名目をあらはして説を立<sup>タテ</sup>  
れし也尊俊作法目録に仮名句題の事先五「(23才)  
もじ七もじ古歌の詞を置<sup>オキテコロ</sup>処をかへてよみなさ  
るべく候ともみゆ三代集などやうの名高き集  
の哥の一句を題にしてその句の置所をかへて四  
季恋雜にわけてよみ出る也懷紙の図

詠二首和歌

素然

季書同詠も姓名も  
書ず二行七字也三  
首五首もなすらへ  
知べし

「(23ウ)

やまのしらゆき  
□かはかり□ふりそひて  
こしちなる山のしら雪  
冬をわくらん  
あはてとしふる  
つれなさはわか身のうへに  
成にけりあはてとしふる  
中にきえなて

① 続歌

続歌といふは人々あつまりて二十首三十首五十首

小山田与清「作歌故実」二種 (一) (今井・松本・山田)

百首などよむこと也右記<sup>童形等消</sup>に当<sup>ニ</sup>座ノ続

歌探題等ノ哥ハ数多不可<sup>レ</sup>詠<sup>レ</sup>之詩以可<sup>レ</sup>同<sup>カル</sup>雖<sup>レ</sup>トモ為<sup>ニ</sup>

堪能<sup>ハ</sup>童形<sup>ハ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>心者<sup>也</sup>也<sup>云々</sup>また作文続歌等ノ

会<sup>ニ</sup>相構<sup>テ</sup>不可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>早出<sup>一</sup>云々<sup>こはいづれも見をいましめられし詞也</sup>吾妻鏡<sup>の四十一</sup>

に建長三年二月廿四日甲寅於<sup>テ</sup>前ノ右馬権頭ノ

第二当座<sup>ニ</sup>三百六十首ノ有<sup>ニ</sup>継歌<sup>二</sup>二條中將尾

張少將武藏守遠江守佐渡ノ前司鎌田ノ次

郎兵衛尉等会合ス以<sup>テ</sup>三百六十種ノ重宝<sup>ヲ</sup>欲<sup>ニ</sup>

置<sup>物々</sup>徹書記物語に続哥よむ時自然とり「(24才)

わすれたりなどして題残て已<sup>ニ</sup>短尺かさぬる時

など見出しつれば堪能になげかくること也こゝに

ては少も案ぜずして書て出すこと也頓阿六首

の題をとりて見たして所用侍て小棚<sup>コダナ</sup>の下へ

おしいれおきてまかり出し所慶雲が六首とりたる

題にみなとりかへておきたるを已に短尺かさぬる

所へ頓阿かへりてみれば悉以前の題にあらざるを

墨おしすりてさらく<sup>イタシオハナ</sup>と書て出<sup>ハナ</sup>畢此哥あまりに「(24ウ)

皆よき間慶雲申けるはかしこくぞ仕たるかやうの

時こそ堪能のほどはあらはれ候へと申ければうたて

きよしをぞ申けるそのうたに一首おぼゆるに

橋霜といふ題にて

山人の道のゆき、の跡もなしよの間のしも

のま、のつき橋など見えたるにて思ふべしこれは

百首の続歌ならば堀川百首などやうのもの

にまねびて春廿首夏十五首秋廿首冬十五首「(25才)

恋十首雜廿首など探題を定て作者の多少

に依て各一首二首にても三首五首十首にても

堪不堪に依てよむことも又題は少くて哥おほきことも有<sup>り</sup>それは五十題にて百首よみ三十題にて五十首よむ也その時は同題を二人三人にてもよむこと有<sup>へ</sup>し其探題は短冊に書て後に懷紙に清書すこの卷を続歌懷紙といふ也さて続歌の所見鎌倉より後のは拳<sup>マキ</sup>尽しがたし」(26才)

⑭ 続歌懷紙

ツギ  
続歌の懷紙は端作に季同書も詠の字も

なく続何首和歌と書き次、クタリ行に春何首など書

てそれより題と歌を書つらね名乗は下の句の下に  
書也官位姓は書ず名乗のみ也すべて端作の詠の  
字と末の下草は寄合の懷紙にはなきこと也その

(一行分空白)  
「  
(26ウ)

続百首和歌  
春二十首  
立春  
若草  
柳  
名乗  
名乗  
名乗

懷紙のやう大かた十五首  
以上の懷紙におなしくて  
名乗を下の句の下に上の  
句の果よりも少しさげて  
書也末にもと草(雲根)し  
紙の継目に書べからず

「  
(27才)

續三百六十首倭歌  
春何首  
題何  
名乘  
名乘  
名乘

「  
(27  
ウ)  
」

續二十首和調  
菊

菊花盛

紅葉淺深

九月尽

名乗

名乗

名乗

名乗

「  
(28才)

続五十首和歌  
 春十二首  
 初春

雪中鶯  
 名乗

橋辺霞  
 名乗

○

一題を二人にてよむ時は  
題を別に書くことなく  
各名乗のみ書也

作者同上の時は  
（ママ）  
名書なし也

「  
(28  
ウ)  
」

懷紙の体大かた十五首以上の懷紙に似たり丈は  
一尺二寸許にて紙員はよろしきにしたがふ繼目  
の上に文字書<sup>ツギメ</sup>ことなし檀紙烏子紙を料紙と  
すさて続歌懷紙には別に目安を添たるもあ  
りその目安は懷紙の始に繼<sup>ツギ</sup>そへたるも奥に繼<sup>ツギ</sup>  
そへたるもあり一様ならぬこと、見ゆ目安の図

姓名家統五十首和歌  
題

春十二首  
初春 雪中鶯 橋辺霞  
行路梅 春月 岸柳

夏七首 秋十二首 冬七首 恋六首 雜六首みな  
此順に書て次に作者の姓名を書也

題の字姓名と平頭に  
書き春十二首を二字下げ  
て書也

題は二段三段四段  
よろしきに從ひて  
書へし

「(29才)

作者  
中宮亮藤原某 二首  
中務権大輔源某 一首  
已灌頂阿闍梨某 三首  
僧某 一首  
但馬守平某 四首  
某殿北方家某 一首  
某家雜仕某 三首  
某氏妻某 二首  
某氏母某 一首  
某氏女某 三首  
某氏某 一首  
尼某 一首  
平某 五首  
某寺瑞紫大和尚某 一首  
法橋某 二首  
但馬守藤原某 三首

作者の名は官姓名  
を書て位は書す地下  
の名書は時互に依  
て何氏太郎源某  
何氏何氏衛平某  
何氏左衛門□□(虫損)某  
何氏忠七郎平某  
何氏文三郎平某  
など書べしまた  
名の下は首  
など細書すし

「(29ウ)

「(30才)

④(ママ) 唐紙に歌かく

唐紙に歌書ことあるましきこと、おもへるはかたくな  
はしきわさ也愚記<sup>文龍二年五月八日の条</sup>に自<sup>リ</sup>鷹司殿<sup>二</sup>承<sup>レ</sup>色紙  
卅二枚幸淵僧都<sup>寺戒名</sup>所望<sup>ノ</sup>色紙二枚或人所望<sup>ノ</sup>  
三社託宣<sup>唐紙二枚</sup>行海所望<sup>ノ</sup>廿一代集<sup>ノ</sup>卷頭歌<sup>也為メ也</sup>  
懸<sup>レ</sup>ンガ也今<sup>ニ</sup>日書<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>とあるにて唐紙に書たる例を知べし

⑤(マ) 懷紙の礼紙

懷紙に別に白紙を重<sup>カサス</sup>るを礼紙といふ明月記<sup>コト</sup>ノ歌<sup>ライシ</sup>「(30ウ)  
部類<sup>樂書可詠進出</sup>に書<sup>ク</sup>高檀紙二枚<sup>三枚とあるは二首なれば也</sup>  
加<sup>レ</sup>礼紙<sup>如<sup>二</sup>立文<sup>一</sup>ノ裏<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>云々</sup>二水記<sup>大水五年三月の条</sup>に高  
檀紙二枚<sup>重<sup>テ</sup>書<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>二枚重<sup>スル</sup>事是又無</sup>  
益<sup>ノ</sup>事歟然ども當時料紙以<sup>テ</sup>外輕薄タル間  
以<sup>テ</sup>簡<sup>ヲ</sup>如<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>也古モ又カクアリト云々今度人々<sup>マテ<sup>二</sup>簡<sup>一</sup>也云々</sup>  
所為<sup>マテ<sup>二</sup>簡<sup>一</sup>也云々</sup>云々など見えたるにておもふべし

⑥(ママ) 旅道

旅道をたびちとよみたるは古歌にをさ<sup>レ</sup>見え<sup>「(31才)</sup>  
ずたびみちたびのみちとよめるは例ありされば  
旅道と文字に書たらんはタビミチともタビノミチ  
ともよまるれは難なし仮名にタビヂと書く  
はひがことなり和泉式部集<sup>卷二</sup>に  
あはれなることをいふには都出てゆくたびみちの  
とほき也けり又<sup>「(以下空白)</sup>

「(一行分空白)

〈和泉式部集  
を見出て補

へし」

「(この上空白) 新勅撰<sup>旅</sup>に前中納言匡房<sup>「(31ウ)</sup>

まだしらぬ旅のみにそ出にける野原篠原人と  
とひつゝ夫木抄<sup>二</sup>に為道朝臣

はこね山さかしき嶺にしく板のいたくるしき  
旅のみちかな此外にもおほかるへし

① 儒家医家画家同朋坊主茶道

盲目坊官などすべて僧形の人は和

歌に名乗を用ず

儒者医者画師同朋坊主茶道盲目坊官など」(32オ)

すべて禿形<sup>マ</sup>禿形は法師歌<sup>マ</sup>にて十徳法服など著用し

唐名<sup>某麻某南など二</sup>積名<sup>某阿弥某某院など</sup>をもて通<sup>ヨビ</sup>

称とするものは懷紙短冊詠草草紙なに、か

ぎらず和歌に名乗を用たる例なき同朋は

衣服は俗服なれど禿形にして冠者<sup>禿髪やろ</sup>

者なりならず又積名つきて某阿弥と呼名するゆ

ゑ名乗は用ぬ也医師も俗医は俗人におなし

唐名禿形にて十徳を著用する輩は名乗を」(32ウ)

書す儒家画家もこれにならずらへて知べし坊

主茶道盲目坊官の類或は唐名積名をつき

十徳法服を用し禿形の徒なればかなら

ず名乗は用ましき也さるに近來医師坊主

茶道などの歌読みだりに名乗をつくりて

書ちらすめるはいにしへに例なきみだりこと也

塙検校は博識の盲目なればこれを心得て

保己一といへる呼名<sup>ヨヒナ</sup>のみ用て別に名乗を書こ」(33オ)

となかりき連歌師俳諧師茶湯師碁打<sup>ゴウチ</sup>

象碁指<sup>シヤウキウシ</sup>などもみなこの定也むかしの連歌師

に名乗を別に用たるはたえて聞ぬをも思ふべし

② 法師姿の歌読<sup>并</sup> 総髪<sup>并</sup>の歌読

歌読連歌師などかしら剃れるはもと乱世

にありふる道かたくしてたけきものゝふのために

首切られんことのおそろしさにせめて法師のま

ねして命<sup>イノチマタ</sup>全せんとおもへる臆病心におこれる也」(33ウ)

宗祇宗長の類すべて敵国の中を往来して

殺されざるは僧形となりしゆゑの仏徳也さ

れど形は西行めきて心は西行ならず銀<sup>シロカネ</sup>の猫<sup>ネコ</sup>

をもえ拾ぬのみかは酒食に耽るをもて風流と

いひなしおのゝ活計<sup>ヨウケイ</sup>のわざをぞはかるめる儒者

医師画師などの法師姿なるも又首切ら

れじの用意<sup>ヨウイ</sup>にて通世者世になし者のさまを

まねびし也名古屋玄医が丹水子<sup>巻上</sup>に或問曰」(34オ)

医ノ為ニ僧形一何<sup>ニ</sup>也曰ク無ニ官位一者ハ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>近<sup>ニ</sup>於貴<sup>ニ</sup>

故ニ与<sup>ニ</sup>僧官<sup>ニ</sup>召<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>或ハ曰ク古有<sup>リ</sup>驢行<sup>ニ</sup>私<sup>ニ</sup>スル人ノ妻<sup>ニ</sup>妾<sup>ニ</sup>

者<sup>上</sup>故ニ使<sup>レ</sup>ト為<sup>ニ</sup>僧形<sup>一</sup>如<sup>シ</sup>ト陽侯殺<sup>シ</sup>テ蓼侯<sup>一</sup>而竊<sup>ニ</sup>其<sup>ス</sup>

夫人<sup>一</sup>故ニ大饗<sup>ニ</sup>廢<sup>ニ</sup>スル夫人<sup>ノ</sup>之礼<sup>一</sup>者<sup>上</sup>也<sup>調の調子</sup>といへる

はよくもかうがへぬ説にて論ずるにたらず今

の世は総髪<sup>ソウハツ</sup>とて月代<sup>サカヤキ</sup>そらぬ総角頭<sup>フカシユアタマ</sup>の体の

者も出来にたりみづからは法師姿の人とう

らうへにて古代めきたる公家めきたる頭つき」(34ウ)

よと思ひたれとこれはた世にそけものゝ髪さま

にて実<sup>マコト</sup>は法師姿にかはらぬしわざ也これに一説

あり法師くさゝをきらふ妻妾の心とらんと

てうるさきをねんじたる総髪は垢くさげに

も汗くさげにも見え又よくつくろひてかうはし

き油をひきつや、かにけづりなし紫の紐し

てゆひよそほひたるなどは乞食芝居の大將髪

めきてとりくにかたはらいたしされば法師頭ホウシアタマ」(35オ)

総髪ソウハツともに当代の御代の正キ体にあらず君の

ため世のために志を立ていそしみはげまを

のこななどはかけてもおもふまじき姿也されど

功なり名とげ年おい世に隠れたらん後は

かくもあべいことなるにいかで高貴の御前に召オマヘメサ

れて物たばらばやいかで人の上席シヤウセキに著てした

りかほせばやの心がまへにてその家にも生れず

その業をもせざるもの、わかきほどより総ワ」(35ウ)

角 姿法師姿ならんいと有まじきわざ也また

高貴の御家にても法師姿に心ゆるし給ふこといか

にぞやいにしへの法師官女を犯し人の妻妾オカ

に通ワタクシせしものかぞへ尽すべからず法師とても淫

具もちたらんには女どもいみきらふべきかは賢

明の君はさる世になし姿の者近づけ給はんより

正体の人を召まつはしたまはんこそ心すゞしき

わざなめれ儒家はこゝに眼をひらきて近來」(36オ)

総角 姿法師姿のものいとくまれ也当代のや

ろうあたまといへるはもと丁が頭の体サマに似たれ

ばよほる髪ガミといふべきを誂てやろうあたまとは

いへる也仮名も与保呂ヨホロと書を正タマシとす也呂宇ヤロウの也

は与の通音也保を略き呂を長く引て也呂宇

といふ也けり丁は今イマの世の夫役の者をいふ民の

男廿一より六十までを正丁とし六十一より六十五

までの老者と残疾の者とを共に次丁とし十」(36ウ)

七より廿までを中男とす此等その役せらる、

品によりて仕丁役丁白丁直丁駈使丁荷

丁軍丁運丁鋤丁綱丁厮丁助丁なとさまく

の名目ありくはしきことは孝徳紀キ 持統記

類聚国史(二字分書) 職員令戸令賦役令延喜

式(二字分書) など考てしるへし与保呂は和名抄

三の巻手 足類部 に太素経ノ注ニ云ク臙ハ曲脚ノ中也和名与保呂ヨホロ

と見えて俗に足のヒツカバミといふところなり新」(37オ)

撰字鏡部内には臙ハ曲脚ノ中也字豆阿志また臙ハ

脚ノ筋也也支比々須乃知又与保呂乃須知脚ノ之

後ノ大筋などいひ仁徳紀(二字分書) には臙踵ともあ

り物語書フミ 同きるはわびしなどその外所見おほかり

ばかりなどいへるも髪カミのさがりばの臙ヨホロのあたり

までおよべるさま也丁ヨホロは脚力駈アリキハセツカハル使ツブの夫なれば

脚アシの名をもてよぶこと今の人足ニソクといふも同し

心也されば令には丁ヨホロにやがて脚の字をも用」(37ウ)

たり後三年の絵をはじめとして古き画卷に

下人のやろう頭ガシラとおほかりこれ丁ヨホロの頭カシラのさ

ま也貴人にはあるまじきことなれど兵革打つゝ

きたる世甲ウツキ著るに頭上カシラ熱れて堪がたければ月

代シロとて半月の形に百会ヒヨウのあたりを刺透ソリスカ

したること今の児童チゴワハの中刺ナカソリといふものに

おなし月輪ツキワタリ閑カミの玉海タマミ 空徳ノ上ノ上同様に下米花ノ月夜 春門院崩御の条

に自二件ノ簾中一時忠卿出ス首ヲ 其頭屑不正カラ月代大ニ 見苦シテ色殊ニオス」(38オ)

云 西行撰集抄卷四の志賀中将頼実発心の

条にあさましくやつれたる僧のちかく家

を出けると見えて月しろなどあざやかに見え

たるが出来れり云々又卷六西住上人往生の条

にとしかたぶきてもとゞりをきり月しろ見え

わたり云々又卷同近衛院三位入道の条に月し

ろなどあざやかにて近く家を出たる人とおほ

えはべるが云々砂石集上巻六説経師ノ強盜ヲ令ニ「(38ウ)

発心ニ一条にサテソノ次ノ日ノ夕方月代有ル入道コ

ノ房ニ来テヒソカニ申入ケルハ夜部ノ強盜入道

ニナリテ参テ候云々太平記卷五大塔宮熊野

落の条に片岡八郎矢田彦七アラ熱ヤトテ

頭巾ヲ脱テ側ニ指置ク実ノ山伏ナラネバサ

カヤキノ跡隠ナシ云々参考本には月額と書

にて知らる結城戦場物語の画卷にも結城

七郎氏朝切腹の体を月代刺たる頭にぬか「(39オ)

きたりさて月白をサカヤキともいふは馬の頭

を逆焼したるさまに似たれはなるべし応

仁より後天下大に乱れて武士甲を脱間なく

熱さしのきに月白を刺ひろめて遂に丁頭

のさまにはなれる也西山縁起梅津長者などの

画にはさまでいやしからぬ人のやろう頭見ゆこれ

勇猛の武士の頭つきなれば万民ことくくまね

ひにせて古代の総髪は公家神通者医師「(39ウ)

などやうの弱き長袖の人にのみ残れるに後には

医師もやろう頭や法師あたまやこゝろくくの

あたまでもてふりあるく世とはなりになりそもく

今のやろう頭にしへの風にはかなはねと天竺

の羅髮円頭にもまねばず清国の罌粟頭

にもよらず独万国に秀ておもしろくたふと

き勇士の頭つき也これを武士頭とはいはすし

てやろう頭とよぶはくちをしきわざ也又今の「(40オ)

俗の人を罵詞に。コノヤラウメ。アノヤラウメなど

いふはワラハの詛語也畿内の人はコノワロカノワロなど

いへり丁頭のヤロウと思ひまがふべからず野郎な

ど、文字によりたる説は取にたらぬひがかう

がへ也因にいはん髪を剃ことは出家のしわざを字へるにていにしへ

剃刀もてそること、なりぬ

### ㊦冠置字の歌

歌の頭に定たる文字を置てよむはもと沓冠「(40ウ)

の歌の冠のみ也源ノ順ノ集にあめつちの哥四十八首もと

藤原ノ有忠朝臣□六なんよめる返し也かれはかみ

のかぎりにそのもじをすゑたりこれはしもにも

すゑ時をもわかちてよめる也云々頓阿ノ高野

日記にいろはを冠リにおきて四十八首をつくり出し

影前にそなふ

いまはとて仏の道をもとめねはたまく人になるか

ひもなし「(41オ)

ろもかいもわれらはとらて法の道た、ふなぬしをた

のみてそゆく

(この間三行半墨線を引く)

姉小路権中納言基綱卿ノ春日社参ノ

記に南無かすがの大明神といふことを一もじづ、五文

字のかみに置て十三首の法楽をなんよみ侍り「(41ウ)

ぬる此心ざしひとへに題の心をおもひてありのまゝに

いひ出しぬるにも侍らす又詞をかざり心をたくみて

思ひしづめるにもあらず唯あめのした静に君が



代を長く久しくと思ひ又は数ならぬうき身を

うれへて行すゑを神にまかせてうきをもよろ

こばしきをも共にいひあらはせるばかりにて侍れ

は哥のすかたにめで給ふべきふしも侍らねど心ざ

しの深き色に詞の花なきを忘れて侍りぬいはぬ」(42才)

心のうきをもそらに照覧あるべきことなれど

とかくすます心にすゝめられて身のむかし身の

行すゑ思ひと思ひ出すふしをばかたのやうに

書つけ侍りぬこれさらに人に見せてあざけ

らるへき事にも侍らねば心のうちに思ひめぐ

らしことのはに出し侍らずともおなじこと

なれど猶たしかなるうれへのほどをも神には

しられ奉らんとぞ思ひたまうるなり」(42ウ)

#### 秋天象

なかめつゝ更れはいとゝすみ増る心や月の光なるらん

#### 秋天象

村雲のゆきゝをはやみ時雨きて野分に成ぬ秋のくれかた

#### 秋地儀

かきりなくあふく心の色とみよ三笠の山の秋の千入を

#### 秋地儀

過がてになかめてけりな春日野のおとろの露の秋の盛りを」(43才)

#### 秋植物

風すさぶ草木はあれど萩ばかりそよや秋ぞと聞つてそなき

#### 秋植物

残しおかん秋の形みかから錦枝に一村うすき色哉

#### 秋動物

立まよふ霧のまきれにくる鴈やはなれぬつらも絶間みゆらん

#### 秋動物

いとゝしくをじかの声の哀さもことしの秋の旅寝にぞしる」(43ウ)

#### 秋雑物

身のよるべ神はしらせよさほ河の霧の朝けにまよふすて舟

#### 秋雑物

山の端の月を東にいそげとやこの大寺の入あひのかね

#### 秋人事

うき事を何ぞといはゝこたへましとはれぬ秋の夕ぐれ空

#### 秋人事

しるやいかにねても覚ても秋のよの長き思ひを神にまかすと」(44才)

#### 秋人事

結び置しちきりや深き神と君代々に待みる秋の手向は

宣胤卿記永正三年二月廿二日の条に今度於神前詠哥

かすが山神は四所五度ぞけふの祭にわ

れはつかへし

かすか山神はしるらしおそくさす藤の糸枝の

春をまつとは春日大明神の五字を句の首に

おきし」(44ウ)

かすか山日ことにいのる大麻を明かにみよ神し

守らは置字の歌のさまこれらにて心得べし

所見いとおほくてあくるにいとまなし

#### ③天地の歌

源順家集にあめつちの哥四十八首もと藤原有

忠朝臣藤六なんよめるにかへしなりかれはかみ

のかきりにそのもしをすゑたりこれはしもにすゑ

時をもわかちてよめる也」(45才)

春

あさしと打かへすらし小山田の苗代水に  
ぬれてつくるあ

めもはるに雪間もあをくなりにけり今こ

そ野へのわかなつみてめ

(以下四行分墨点を續く) (45ウ)

按にあめつちの歌はいはゆる沓冠の体也置字に  
あめつちほしそらなとやうのもじを置たればさは  
いへる也これ藤原有忠朝臣のはしめておこせたる  
かへしを順のせられし也歌の上下に置字をして  
よめれば沓冠の歌なれど天地の歌と名目に  
よりて別に出す

⑤沓冠置字の歌

八雲御抄<sup>卷一</sup>に沓冠始をはりに其字とさだめて 「(46オ)  
置なり文字は一も二も三も心にまかせて詠<sup>レ</sup>之

はなのなかにやあくやとて分ゆけば心そともに

ちりぬべらなる是はをははははを果にてなが  
めをかけたる春也かやうの事共は力もいらすむ  
げにやすきことなれば注に及はず<sup>云々</sup>按にはな  
の中<sup>云々</sup>の歌古今<sup>名物</sup>に二の句目にあくやとて

と有て事書にはをははははをはてにてなが

めをかけて時の歌よめと人のいひければよめる僧 「(46ウ)

正聖宝とあり遍昭家集にも事書おなしや

うにて入たるは僧正聖宝を僧正遍昭とふと  
おもひあやまりて後の人集にとり載けんも知  
へからず新勅撰<sup>歌雜</sup>に春の始に定家にあひて  
侍けるついでに僧正聖宝をははははをはて

にながめをかけて春のうたよみて侍るよしを  
かたり侍ければその心よまんと申てよみ侍ける大  
僧正親巖 「(47オ)

はつねの日つめるわかななかつらしと野への小松

にならへてそ見るこれらの哥にて沓冠のさま思ふ

べし源順集のあめつちのうたもまた沓冠の体

なり

⑥折句并沓冠折句

和歌童蒙抄<sup>卷十</sup>に折句ノ哥

カラコロモキツ、ナレニシツマシアレバハル／＼キヌルタヒ  
ヲシゾオモフコレハ句ゴトノハジメニカキツバタトオキタリ」(47ウ)  
カブリノウタト云

アフサカモハテハユキ、ノセキモキズタヅネテトヒ  
コキナバカハサシコレハ句コトノカミシモニアハセダキモノ  
スコシトスエテ仁和ノミカドノカタ／＼ニタテマツラ  
セタマヘリケルニミナコ、ロモエヌカハシヲタテマツリ  
ケルナカニヒロハタノミヤス所ノタキ物ヲ奉ラセ玉ヘリ  
ケレバ心アルコトニメデオボシタリケルトカタリツタヘ  
タルウタナリ<sup>按に此説榮花物語ノ月の宴にみゆ</sup> 「(48オ)

ヲノ、ハギミシアキニ、ズナリソマスヘシタニアヤナ  
シルシケシキハコレハヲミナヘシト云コトヲ句ノハジメニオ  
キハナズ、キト云モジヲ句ノハテニサカサマニスエテ  
ヨメル也此二首ヲバ上下ニ置タレバクツカフリノウ  
タトイフ<sup>云々</sup>奥義抄<sup>卷上</sup>和歌六牀の条に

五<sup>ニ</sup>折句ノ哥は五字あることを毎句のかみにおく也  
小町が人に琴かる哥<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>

ことのはもときはなるをはたのまんまづはみよ 「(48ウ)

かしへて□□□□とことたまへとおけり六<sup>ニ</sup>杳冠<sup>ハ</sup>折

句ノ哥<sup>ハ</sup>十字あることを句の上下におく也此ノ哥在<sup>ニ</sup>

村上ノ御集<sup>ニ</sup>一広幡御息所ノ許也而<sup>ル</sup>載<sup>ス</sup>喜撰

式<sup>ニ</sup>尤<sup>モ</sup>不害<sup>也</sup>若<sup>モ</sup>以<sup>テ</sup>古哥<sup>ヲ</sup>歟仁和ノ御製

あふさかもはてはゆき、の<sup>云々</sup>あはせだき

ものすこしとおけり已上出<sup>ツ</sup>喜撰式<sup>ニ</sup>云々八雲御

抄<sup>一</sup>に折句毎句ノ上<sup>ニ</sup>物ノ名を一もじづ、おきたる也

からころもきつ、なれにしつましあればはるく」(49オ)

きぬるたびをしぞ思ふ

をぐら山みねたちならしくしかのへにけん

あきをしるひとぞなき折句ノ杳冠<sup>ニ</sup>は毎句、

上下に文字を入たる也

あふさかもはては<sup>云々</sup>是はあはせだき物すこしと

いへる也凡此の字の置やう是は普通の様也この外も

又よめるやう

をの、萩見し秋に、す<sup>云々</sup>是はをみなへしをかぶり」(49ウ)

にしてはなす、きを杳にしてさるさまによませたり

はかなしなをの、をやまだつくりかねてをたにもき

みはてはふれずやこれは花をたづねて見ばやと云事

をいふ是はさきく<sup>云々</sup>の字のすゑやうにあらず如此

さまく<sup>云々</sup>なり已上の説どもを考て折句は毎句

の上にもじを定ておき杳冠の折句は毎句の上下

にもじを定ておくること知べし拾玉集<sup>卷四</sup>の杳

冠君を久しくまもれ」(50オ)

きにけらし見ても見まくおもふやまひじりの

あともさこそ住けれ<sup>按に此歌おの字とをの  
字の假字混して用た  
誤也</sup>

又折句ひえのみや

ひとことにてえてうれしきはのりはなみよのほとけ<sup>の歌</sup>

のやとのものとして此外所見おほかれどわづらはしければ引出ず

⑧<sup>ママ</sup>当座の歌おほくよまず

右記<sup>童形等の条消  
息事の条消</sup>に当座統歌探題等ハ哥数」(50ウ)

多ク不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>詠<sup>レ</sup>之詩以可<sup>レ</sup>同<sup>カル</sup>雖<sup>レ</sup>為<sup>リ</sup>堪能<sup>ニ</sup>童形ハ可<sup>キ</sup>

有<sup>レ</sup>心者<sup>也</sup>也只<sup>々</sup>不見<sup>シテ</sup>風情ノ之絶妙ヲ可<sup>レ</sup>思<sup>フ</sup>露詞ノ之

幽<sup>ニ</sup>玄歟<sup>云々</sup>是は童形の事にいひしなれど

女房歌読などもはやりかに歌おほくよみ

出たるはにくげに見ゆめれは心すべきわざ也

⑨<sup>ママ</sup>会席に装束引繕ふ

会席には男女装束を引つくるひきらくしき

さまにてつどふべし右記<sup>童形等の条消  
息事の条消</sup>に衣裳」(51オ)

等ノ事<sup>ハ</sup>和漢ノ会席ニ出仕ノ之時殊<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>鮮<sup>ニ</sup>也昔<sup>シ</sup>

延喜ノ御宇此道中興ノ之時至<sup>ニ</sup>和四人漢七人<sup>ニ</sup>之

外長<sup>ニ</sup>于周篇和什<sup>ニ</sup>達者並<sup>ニ</sup>肩<sup>ヲ</sup>調<sup>レ</sup>面<sup>ヲ</sup>天曆<sup>ノ</sup>

御時<sup>モ</sup>延喜ノ遺風相統<sup>テ</sup>而梨壺ノ五輩竹園<sup>ノ</sup>

両客<sup>ハ</sup>平按<sup>に華明親王其  
親王の御事也</sup>其ノ外ノ緇素折<sup>レ</sup>花探<sup>レ</sup>珠触<sup>レ</sup>境<sup>ニ</sup>

隨時<sup>ニ</sup>公私ノ佳会朝参夕至或<sup>ハ</sup>飛<sup>ニ</sup>錦車<sup>ヲ</sup>或<sup>ハ</sup>

連<sup>ニ</sup>玉冠<sup>ニ</sup>青白紙面<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>鳳文ノ之詩<sup>ニ</sup>人<sup>上</sup>左右<sup>ノ</sup>

臂<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>刷<sup>ニ</sup>鶴<sup>ノ</sup>陵<sup>ノ</sup>袂<sup>ニ</sup>士<sup>上</sup>古人旧記披<sup>ニ</sup>閱<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>」(51ウ)

処殆<sup>ト</sup>驚<sup>レ</sup>目者<sup>也</sup>也当世五条ノ釈阿禪門<sup>傳成</sup>

自<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>老<sup>ニ</sup>此ノ執心不<sup>ニ</sup>廃絶<sup>セ</sup>云々<sup>云々</sup>など見え

その外古書に所見おほかり

⑩<sup>ママ</sup>屏風障子などの絵を哥によむやう

顕昭法橋の拾遺抄ノ註<sup>師夏</sup>行すゑいまたとほけれ

と夏山<sup>云々</sup>の歌注に屏風障子等ノ絵ヲ歌

ニヨムハヤガテ絵ニカケル人ノ心ニナリテヨムナリ<sup>云々</sup>

⑪<sup>(ママ)</sup>男女互にその心になりて歌よむ」(52オ)

顕昭法橋か拾遺抄註<sup>部恋</sup>わかせこかきまさぬ

よひの<sup>云々</sup>哥の注に男ノ歌ノ女ノ心ニナリテヨ

ムモアリ又女ノ歌ノ男ノ心ニナリテヨムモアレバ

此歌ハ女ニナリテ詠<sup>ル</sup>カ又女ヲワカセコトヨメル

歌モアリ<sup>云々</sup>と見ゆ

(三行分空白)」(52ウ)